

2015年度 九州大学 前期 国語

一 随筆

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	40分	渡辺保『私の歌舞伎遍歴』からの出題。渡辺保は演劇評論家で、その対象は、歌舞伎などの古典演劇から現代演劇まで幅広い。代表作に、『女形の運命』、『忠臣蔵 もう一つの歴史感覚』、『俳優の運命』などがある。	<p>本文で用いられている語彙のレベルは標準的なものであったと思われる。そのぶん、本文を読み解くのは容易だと感じたかもしれないが、論理の流れを厳密に捉えて考えようとする、受験本番で正しい解答を導き出すのはかなり困難だったと推測される。基本的に、本文で語られているのは、筆者がどのようにして歌舞伎を「知る」に至ったか、という内容であり、これに沿って考えていくことが求められる。</p> <p>問1は、随筆文の中で使われた意味がぼんやりした言葉に焦点を当て、その意味をはっきりさせるといふ問題だった。問2は、本文の論旨を簡潔に説明するといふ問題で、傍線部周辺の情報だけでは解答できない問題であった。問3</p>

傾向と対策
<p>は、「歌舞伎を好きになることは歌舞伎を知ることの(必要)条件である」といえるのはなぜかを説明する問題だった。受験本番で焦りがある状態だと、「十分条件」であることを補足しているようにみえる解答を書いてしまいかねない問題だったと思われる。問4では、「羽左衛門が出発点となって歌舞伎を知るに至った」といふ本文の論旨を理解していることを簡潔に説明することが求められた。問5は、「即時性」を感じさせる本文の表現を手掛かりに、時系列・因果関係を考えて解答を書くことになる。本文に明示されていない内容についても考える必要があり、非常に難しい問題だった。</p> <p>問6では、「脱出」をどのように言い換えるか、本文中の複数の箇所を根拠に考える必要があった。まず、根拠とすべき箇所が複数あることに気づき、そのうえで適切な言い換えを考えなければならず、こちらも難問だった。問7は少し難易度の高い漢字の書き取り問題だった。</p> <p>論旨そのものを捉えることはそれほど難しくはないと思われる。しかし、だからと言って、設問で求められている内容をうまく説明できるとは限らない。問1・2・4のような問題を確実に得点したうえで、問3・5・6などの問題で制限時間内にどこまで正確に設問に答えられるかで、差がついたものと思われる。間違えた問題については、何度も解き直すことで、難しい問題に対応できる力をつけることができるだろう。また、同じ大学を志望する友達と、自分が書いた解答をお互いに見せ合って意見交換をすることで、「論理的</p>

傾向と対策

に正しく本文を理解できていたのか、「自分が考えていたことを他の人もわかるように説明できているのか」、「他の意味にも取れるような文章を書いてしまっていないか」などを確かめることができるだろう。

解答

問1 ⑤

問2 歌舞伎を知る点。(8字)

問3 歌舞伎を知ることは、必ずしも生存に必要ではないが、歌舞伎を知るためには、歌舞伎を見るという形で、長期間にわたってそれとかがわかることが求められるから。(74字)

問4 舞台を実際に見ていないという劣等感をもち、直接見るという体験には到底到達できないとわかったうえで、羽左衛門という見たことがない役者について想像力を働かせるといふ苦しみを伴う過程は、筆者が歌舞伎を知るうえで重要な働きをしたということ。(116字)

問5 『三人吉三』での羽左衛門と源之助のせりふの読み方には、硬質さを感じるかやわらかさを感じるかという相違点があることに気づき、その後、前者は立役で後者は女形だと知って、半四郎は源之助より優れた女形であったこと、『三人吉三』の初演は半四郎であったこと、吉三は黙阿弥が半四郎のためにその芸風が活きるように書いた役であったことに思い至り、体験と知識が結びついて歌舞伎の役を理解するという経験をしたから。(196字)

問6 歌舞伎を知るのに重要な働きをすることになる羽左衛門と出会い、実際にその舞台を見たことがないことに対して劣等感を抱くことにな

るが、羽左衛門を出発点としてさまざまな想像をするという過程を経て歌舞伎の役を理解することができ、歌舞伎のことを深く知ることができたと感じ、また、劣等感からも解放されたこと。(147字)

- 問7 ① 籠(った)・籠(った) ② 寄席 ③ 我慢 ④ 講釈師
⑤ 誘拐

本文解説

段落解説

I 羽左衛門との出会いと羽左衛門についての幻想(第1〜第8段落)

筆者は疎開先の母親の実家の蔵で歌舞伎の「勧進帳」のレコードを聞き、羽左衛門の声に魅了される。疎開前には歌舞伎座で別の歌舞伎役者を見た経験があり、「東京へ帰ることができたならば第一に羽左衛門を見たいと思った」のであった。

しかし、羽左衛門は急死してしまい、筆者の羽左衛門を見たいという願いは叶わぬ夢となってしまった。その喪失感は幼い筆者にとって非常に大きいものだった。歌舞伎界は、羽左衛門の空白を埋めるために代役として海老蔵を起用し、たちまち海老蔵は人気役者になった。しかし、両者は、声の質、芸風などが異なるため、筆者個人の喪失感を埋めることはできなかった。また、同級生や先輩から、羽左衛門の舞台を見たときの話を聞かされたときに、筆者はやりきれない気持ちになった。そしてそのたびに、筆者の心の中では羽左衛門についての幻想が膨らんでいった。しかし、幻想はあくまで実際に見るという経験には及ばず、劣等感に苛まれることになる。筆者が「この羽左衛門への幻想が実は重要な意味をもっていることを知ったのは、はるか後になってのことであった」。

II 歌舞伎を知る二つの条件(第9〜第22段落)

歌舞伎を知るにはどうすればいいのかよく聞かれるが、筆者はどう答えていいかわからないという。というのも、筆者にとって「歌舞伎は知ろうと思う前に」「目の前にすであつた」ものであつたからだ。

筆者の家は、家族全員が芝居好きだったという。そういう環境で育つたため、「知ろうだの入門しようだのと思つたことがないのに、いつの間にか歌舞伎を見るようになった」のであつた。そのため、筆者は歌舞伎をどう知つたらいいかという質問には答えられないのである。

ただ、「そういう質問をたびたび受けるようになって思うのは、歌舞伎を知る第一のゴツは見て好きになることである」という。生きていくために必要不可欠なものであれば、それが嫌いであつても我慢できるし、さらに言えば、我慢するしかない。しかし、生きていくために必ずしも必要でないものなら、嫌にならばやめてしまえばいい。そして、人間は「芝居がなくとも生きていける」のだから、「歌舞伎を知る第一の条件は、歌舞伎が好きになること」なのだという。

「しかし好きだというのは必要条件ではあるが十分条件ではない」という。羽左衛門についてあれこれ想像することが十分条件であつた、すなわち、その想像こそが歌舞伎を知るうえで重要な働きをしたのだという。羽左衛門という「見たこともない役者に興味をもつ」筆者は、『羽左衛門』の幻想とその舞台を見ていないコンプレックスに悩まされてきた」が、「散々苦しんだ揚句に、この苦しみこそが実は歌舞伎を知るうえで大事なのだと思うようになった」のである。「見たこともない役者について空想し、それを知ろうとする心の働きのもつ効用」は無視できないし、「第一、それも楽しみみの一つなのである」。羽左衛門の映像、レコード、ブロマイド、文章など、「羽左衛

門像」をつくる手がかりになるものは無数にある。「しかしいくら精密に資料をかさねていったとしても、たつた一度でも羽左衛門を見たという体験には到達できない」。それでも、「あゝでもない、こゝもあつたらうかと考え、想像する力」が重要なのだという。「絶対到達不可能なものへ挑戦していく、そのプロセスそのものが歌舞伎を知る二番目の条件だと筆者は考えている。

III 歌舞伎を知ると感じるに至つた実体験(第23〜第34段落)

筆者は、戦争が終わつて東京へと帰つてきた。レコード屋で羽左衛門の『三人吉三』のレコードを買い、たちまち夢中になつた。しかし、他の役者の『三人吉三』も聞きたくなくて、源之助のレコードを買つた。そこで、羽左衛門と源之助の間には、共通点と相違点があることに気づく。「共通点は二人ともせりふをなんの反省もなく、ひたすら歌い上げていることである」。『三人吉三』は黙阿弥の作品で、「黙阿弥はこういわなければいけないんだということ」を学んだという。「相違点は、羽左衛門の硬質さに対して源之助のやわらかさ」であつた。これは、「羽左衛門が立役であるのに対して、源之助は女形だからであつた」。そして、それを知ったときに、筆者は驚きと感動を得た。

吉三は、黙阿弥が半四郎のために書いた役である。半四郎は、「江戸最後の『太夫(女形の尊称)』といわれた女形」だつた。黙阿弥は座付作者で、「初演の役者の芸風が生きるように人間を造形している」。このため、「歌舞伎の役を理解するのに、初演は誰であつたかを知ることが必要」なのである。筆者は、「羽左衛門から出発して源之助、半四郎に至つて、お嬢吉三の役そのものに到達した」。これは、羽左衛門を想像する力によるものであつた。「歌舞伎を知る第一条件が好きだとしても、第二の条件はこの空想力である」という。筆者は羽左衛門、源之助、半四郎といった役者を直接見た

ことはない。しかし、「この決して到達することのない地点を夢見る力がなければ、歌舞伎を知ることができない」という。少なくとも筆者は、そこま
で夢見た時に、歌舞伎を深く理解したと感じ、羽左衛門を実際に見ていない
という劣等感から解放されたのだという。

百字要旨

歌舞伎を知る二つの条件は好きであることと想像すること、実際に、羽
左衛門という見たことがない役者について想像することで歌舞伎を知るに
至ったと感じ、羽左衛門を実際に見ていないという劣等感から解放された。

(100字)

用語解説

―出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

蕩然 広大なさま。

あとかたのないさま。

(注)「繰り返し繰り返しレコードを聞いて、ついには富樫のせりふをソラ
でいえるようになった」という表現からは、この場面では「蕩然」
よりも「陶然(気持ちよく酔ってうっとりするさま)」のほうが適
切であるように感じるが、ここでは原文を尊重することにする。

ソラ(空) 地上に広がる空間。

空模様。

落ち着くところのない、不安定な状況。

心が動揺し落ち着かないこと。

根拠のないこと。

無益なこと。

暗記。

うえ。

疎開 滞りなく通ずること。

戦況に応じて隊形の距離・間隔を開くこと。

空襲・火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物
を分散すること。

稀代 世にまれなこと。

あやしむべきこと。

興行 催すこと。

興したてること。

客を集め、入場料をとって演劇・音曲・相撲・映画・見世物などを催
すこと。

いきおい 活動力。

他を圧する力。

物事が進行するはずみ・成りゆき。

コンプレックス 心の中で抑圧されて意識されなまま複雑な感情を担っ
ている表象の複合体。

インフェリオリティー・コンプレックス。劣等感。

揚句 連歌・連句の最後の七・七の句。

終わり。結局。

実証的 単に施行によって論証するのではなく、経験的事実の観察・実験に
よって積極的に証明されるさま。

よって積極的に証明されるさま。

効用 使い道。

役に立つこと。効き目。

財・サービスが人の欲望を満たし得る能力の度合い。

心持ち 物事を見分し、何かを感じ取った心の状態。

気持ち。

ほんの少し。

夢幻 夢と幻。実体がなく、無常ではかないことを例えている語。

設問解説

問1

解答 ⑤

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 特殊型

解答範囲 I (第1〜第8段落、特に第5・第6段落)

解説

この問題は「複数の選択肢の中から正しいものを選ぶ」という問題であるが、やはり、「初めから選択肢に頼って解答を出す」ことは避けたい。「記述式の問題として解いてみて、自分がつくった解答に近いものを選択肢の中から探す」というプロセスで解答すれば、「ひっかけ」の選択肢にだまされることも防げるだろう。今回は、「いい人」がどういう意味か、選択肢の中から最も適当なものを選ぶという問題だったので、「いい人」がどういう意味かという説明を記述することを求められたと考えて、解答を考えていこう。

傍線部は、「しかし」とも羽左衛門と海老蔵では声の質も違うし、海老蔵は本当は毛剃とか熊谷とか仁木弾正とか、『馬盃』の光秀がいい人だから、芸風も違う。」という一文に含まれている。「しかし」とあるので、この一文は「しかし」以前の内容を踏まえた内容であることがわかる。「しかし」より前の部分では、「筆者は羽左衛門を直接見たいと思っていたが、羽左衛門

は急死してしまった。一方、歌舞伎界は、羽左衛門の空白を埋めるために、代わりに海老蔵を前面に押し出し、海老蔵はたちまち人気役者になった。」というような内容が書かれている。このことを踏まえると、「しかし」は、「羽左衛門も海老蔵も人気役者であった」という内容を受けて、「羽左衛門と海老蔵には異なる」という内容へとつなぐ役割をしていると予想できる。

羽左衛門	・ 人気役者	・ 声の質	・ ???	・ 芸風
海老蔵	・ 人気役者	・ 声の質	・ 「毛剃、熊谷…がいい人」	・ 芸風
共通点		相違点		

両者とも人気役者であるが、その芸風が異なっていて、その根拠として、声の質が違うこと、海老蔵が「毛剃とか熊谷とか仁木弾正とか、『馬盃』の光秀がいい人」(第6段落1文目)であることが挙げられているのだとわかる。このように考えると、「いい人」というのは、「特定の役が」合っている人、似合う人」といった意味であることが推測できる。ここまで考えて選択肢を見てみると、「⑤似合う人」だけがここまでの考察と合致するとわかる。以上より、解答は⑤となる。

《参照箇所》

① 第5段落1〜3文目、第6段落1文目

問2

解答 歌舞伎を知る点。(8字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 本文全体(特に第16段落、第22段落)

解説

傍線部は、「しかしこの羽左衛門への幻想が実は重要な意味を持っていることを知ったのは、はるか後になってのことであった。」という一文に含まれている。「しかし」はこの一文の直前の部分を受けており、「この羽左衛門への幻想」は、「それに同級生やほんの二、三年違いの先輩は、羽左衛門は私の心の蔵の中に閉じ籠ったままであった」という内容を踏まえた表現であることがわかる。さらに、この部分の冒頭の「それに」は、直前の「海老蔵の人氣が羽左衛門の空白を埋めたことは事実だが、私個人の喪失感を埋めることはできなかった」の部分を受けている。

さて、このことを踏まえてもう一度本文をみると、「この羽左衛門への幻想」がどういう点で「重要な意味をもっている」かについては、傍線部付近には書かれていないことがわかる。そこで、しばらく読み進めていくと、第16段落3～5文目で、「見たこともない役者に興味をもつ。私は『羽左衛門』の幻想とその舞台を見ていないコンプレックスに悩まされてきた。そしてさぞさん苦しんだ場面に、この苦しみこそが実は歌舞伎を知るうえで大事なのだと思うようになった。」と書かれていることに気づく。さらに、第22段落1～3文目では、「にもかかわらず、あつでもない、こうもあつたらうかと考え、想像する力が大事だろうと思う。絶対到達不可能なものへ挑戦していく力。あつでもない、こうでもないと思う、そのプロセスそのものが私は歌舞伎を知る、二番目の条件だろうと思う。」とある。したがって、「幻想」が「重要な意味をもっている」というのは、「歌舞伎を知ることにつながっている点」においてであることがわかる。ただし、この設問では、10字以内で説

明することが求められているので、最終的な解答は、「歌舞伎を知る点。」とする。

《解答要素》

① 歌舞伎を知る点

《参照箇所》

① 第16段落3～5文目、第22段落1～3文目

問3

解答 歌舞伎を知ること、必ずしも生存に必要ではないが、歌舞伎を知る

ためには、歌舞伎を見るところという形で、長期間にわたってそれとかわかることが求められるから。(74字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型+理由補填型

解答範囲 II(第9～第22段落、特に第10段落、第13・第14段落)

解説

傍線部冒頭に、「したがって」とあるので、傍線部は直前の内容を受けたうえで表現だとわかる。第12・第13段落を見ると、「歌舞伎を知る第一のコツは見て好きになることである。」(第12段落1文目)、「好きでなければどうしようもない。人はパンのみで生きるものにあらず。しかしパンを得るためには嫌いでもつらくとも我慢できるし、またするしかないが、パン以外のものは嫌いならやめればいいのである。人間はパンがなければ生きていけないが、芝居がなくとも生きていけるからである。」(第14段落1～4文目)とあり、この部分から、「歌舞伎を知る」ための条件として「歌舞伎が好きになること」が挙げられる理由が読みとれる。ここでのポイントは、歌舞伎

は「パン」ではないということである。つまり、「歌舞伎は生存に必要不可欠のものではない」ということである。このことを踏まえると、「必ずしも生存に必要な歌舞伎を知るためには、まずはそれを好きになることが必要である」というような説明ができることがわかる。

さて、ここまで考えたうえで、改めて第13段落をみてみると、「しかしそういう質問をたびたび受けるようになって思うのは」(第13段落1文目)とあり、冒頭の「しかし」から判断して、第12・第13段落の内容はこれより前の部分を受けた内容であったことがわかる。また、第13段落1文目の「そういう質問」が何を指しているか考えると、これは、第12段落1文目の「どう知ったらいいかという質問」のことを指しているとわかる。さらに、第12段落1文目には、「だから私には、どう知ったらいいかという質問には答えられないのである。」と、冒頭に「だから」が含まれており、第12段落もこれより前の部分を受けた内容であることがわかる。さかのぼって本文をみていくと、第12段落は第9～第11段落の内容を受けていることがわかる。第9～第11段落を見ると、「筆者にとって、歌舞伎は『知ろうと思う前に』『目の前にすであつた』ものであり、芝居好きの家庭で育ち、『いつの間にか歌舞伎を見るようになった』というような内容が書かれている。これは、裏を返せば、筆者が歌舞伎を「知っている」のは、家族と過ごす時間の中で自然と歌舞伎を「見ていた」(それもかなり長期間にわたって「見ていた」)からだということを意味している。これは、第13段落1文目の「歌舞伎を知る第一のポイントは見て好きになることである。」という表現とも合致する。つまり、「歌舞伎を知る」ための条件として「歌舞伎が好きになること」が挙げられているもう一つの理由として、「歌舞伎を知るためには、長期間にわたって歌舞伎を見る必要があるから」というものがあると思われる。「好きでもないものと継続してかわり続けることは難しい」ということだろう。こ

れは、傍線部直後の「そこ」(「歌舞伎が好きになること」)にはどんな理屈も何も無い(第14段落2文目)という表現とも合致する内容である。つまり、「歌舞伎を知っている」ということは、「理屈抜きで歌舞伎が好きである」ということを意味する(それほど好きでなければ、必ずしも生存のために必要なものと長期間にわたってかわり続けることはできない)ということである。

なお、解答を書く際には、第15段落1文目の、「しかし好きだというのは必要条件ではあるが十分条件ではない」の部分もおさえておきたい。「必要条件」が何かピンとこない人は、数学1「論理」の内容をもう一度学習しよう。さらに、この文の冒頭の「しかし」から、この文は第14段落1文目の「歌舞伎を知る第一の条件は、歌舞伎が好きになること」を受けているとわかるので、この部分から、『歌舞伎を知る』ということから必然的に『好き』が導かれる」という対応関係が明らかになる。つまり、解答では、「歌舞伎を知っているなら、それは、当然歌舞伎が好きだということである」となぜ言えるのか(「当然」と考える理由は何か)を説明しなければならぬということに注意して、説明を書いていくことが求められる。したがって、絶対に、「歌舞伎のことが好きだから歌舞伎のことを知ることができた」というような主張にみえるような説明を書いてはいけない。

解答は、「歌舞伎を知ることは、必ずしも生存に必要なではないが、歌舞伎を知るためには、歌舞伎を見るといふ形で、長期間にわたってそれとかわることが求められるから。」となる。

《解答要素》

- ① 歌舞伎を知ることは、必ずしも生存に必要なではないが、
- ② 歌舞伎を知るためには、歌舞伎を見るといふ形で、

③ 長期間にわたってそれとかわかることが求められるから

《参照箇所》

- ① 第14段落2～4文目
- ② 第11段落6・7文目、第13段落1文目
- ③ 第11段落7文目

問4

解答

舞台を実際に見ていないという劣等感をもち、直接見るという体験には到底到達できないとわかったうえで、羽左衛門という見たことがない役者について想像力を働かせるという苦しみを伴う過程は、筆者が歌舞伎を知るうえで重要な働きをしたということ。(116字)

難易度 ★★☆☆☆

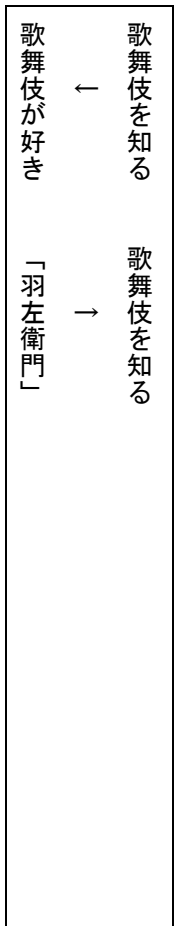
設問パターン 要約型

解答範囲 II (第9～第22段落、特に第14・第15段落、第17段落、第21・

第22段落)

解説

傍線部直前に、「しかし好きだというのは必要条件であるが十分条件ではない」(第16段落1文目)とあり、「十分条件」についても触れられていないため、傍線部はこの部分を受けた表現であることがわかる。さらに、冒頭に「しかし」とあるので、これより前の部分を受けた内容であることもわかる。そこで、少しさかのぼって本文を見てみると、第14段落1文目に「歌舞伎を知る第一の条件は、歌舞伎が好きになること」とあり、このことから、傍線部周辺の本文では、次のような対応関係を説明していたことがわかる。



必要条件と十分条件が何を意味しているのかピンとこない人は、数学I「論理」の内容をもう一度学習しよう。文字通りにとれば、傍線部は『羽左衛門』は『歌舞伎を知る』が成立するために十分な仮定である」ということを表している。これではなんのことかわからないので、「羽左衛門」が何を意味するのかについて考えていこう。第16段落4・5文目を見ると、「私は『羽左衛門』の幻想とその舞台を見ていないコンプレックスに悩まされてきた。そしてさんざん苦しんだ揚句に、この苦しみこそが実は歌舞伎を知るうえで大事なのだと思うようになった。」とある。さらに、第21段落1～3文目、第22段落1～3文目を見ると、「羽左衛門について書かれたものは、明治からその没後まで、これまた無数にある。そこから羽左衛門像をつくることもできる。しかしいくら精密に資料をかさねていったとしても、たった一度でも羽左衛門を見たという体験には到達できない。絶対不可能である。にもかかわらず、あゝでもない、こゝもあつたらうかと考え、想像する力が私は大事だろうと思う。絶対到達不可能なものへ挑戦していく力。あゝでもない、こゝでもないと思う、そのプロセスそのものが私は歌舞伎を知る、二番目の条件だろうと思う。」とある。したがって、「羽左衛門」というのは、「舞台を実際に見ていないという劣等感をもち、直接見るという体験には到底到達できないとわかったうえで、羽左衛門という見たことがない役者について想像力を働かせるという苦しみを伴う過程」のことを指しているとわかる。したがって、『羽左衛門』は『歌舞伎を知る』が成立するために十分な仮定である」という表現は、「羽左衛門という見たことがない役者について

想像力を働かせるという過程は、歌舞伎を知るうえで重要な働きをした」というような意味をもって考えると考えられる。

解答は、「舞台を実際に見ていないという劣等感をもち、直接見るという体験には到底到達できないとわかったうえで、羽左衛門という見たことがない役者について想像力を働かせるという苦しみを伴う過程は、筆者が歌舞伎を知るうえで重要な働きをしたということ。」となる。

《解答要素》

- ① 舞台を実際に見ていないという劣等感をもち、
- ② 直接見るという体験には到底到達できないとわかったうえで、
- ③ 羽左衛門という見たことがない役者について想像力を働かせるという
- ④ 苦しみを伴う過程は、
- ⑤ 筆者が歌舞伎を知るうえで重要な働きをしたということ

《参照箇所》

- ① 第16段落4文目
- ② 第21段落3文目
- ③ 第18段落1文目、第22段落1文目
- ④ 第16段落5文目、第22段落3文目
- ⑤ 第16段落1・2文目、第15段落1文目

問5

解答

『三人吉三』での羽左衛門と源之助のせりふの読み方には、硬質さを感ずるかやわらかさを感じるかという相違点があることに気づき、その後、前者は立役で後者は女形だと知って、半四郎は源之助より優れた女形であったこと、『三人吉三』の初演は半四郎であったこと、吉

三は黙阿弥が半四郎のためにその芸風が活きるように書いた役であったことに思い至り、体験と知識が結びついて歌舞伎の役を理解するという経験をしたから。(196字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅲ(第22～第33段落、特に第27～第30段落)

解説

傍線部は、「そしてそれを知った時に、私はアツと思った。」という一文に含まれている。冒頭に「そして」があるので、傍線部はこれより前の部分を受けた内容であることがわかる。そこで、傍線部より前の部分を見ていくと、第27段落1・2文目に「相違点は、羽左衛門の硬質さに対して源之助のやわらかさである。それは羽左衛門が立役であるのに対して、源之助は女形だからであった。」とあり、これを受けた内容だとわかる。さらに、傍線部中の「それ」は、「羽左衛門が立役であるのに対して、源之助は女形だからであった」という内容を指しているのだということもわかる。また、傍線部中の「アツと思った」という表現であるが、これが具体的にどのような気持ちを表しているのかは本文中に書かれていない。一般的に、「あつ」という言葉で表されるのは、驚きや感動といった感情である。そこで、「アツと思った」という表現については、「感動した」、「驚いた」といった内容を表しているものとみなして考察を進めていくことにする。つまり、さしあたっては、「羽左衛門が立役であるのに対して、源之助は女形であるということを知って、感動した・驚いた」理由について考えていくことになる。

傍線部より後ろの部分を読み進めていこう。第32段落1文目を見ると、「羽左衛門から出発して源之助、半四郎に至って、お嬢吉三の役そのものに到達した。」とある。これは、「羽左衛門が立役であるのに対して、源之助は

女形であるということを知って……」という傍線部の内容と関係すると予想がつく。そこで、「半四郎に至って、お嬢吉三の役そのものに到達した。」(第32段落1文目)の部分をもう少し詳しくみていくことにする。第29段落2〜4文目を見ると、「八代目半四郎は明治十五(一八八二)年に死んだ江戸最後の『太夫(女形の尊称)』といわれた女形。源之助は浅草田圃(浅草の地名)に住んでいたために『田圃の太夫』といわれたが、『田圃の太夫』は半四郎の『太夫』に対する、後輩の、あるいは二流のという意味を含んでいる。」とある。さらに、第29段落1文目を見ると、『三人吉三』のお嬢吉三は、黙阿弥が八代目岩井半四郎のために書いた役である。」とあり、第29段落1・2文目には、「黙阿弥は歌舞伎の狂言作者がほとんどそうであるように、座付作者であった。だから初演の役者の芸風が生きるように人間を造形している。」とある。続く第31段落1文目には、「歌舞伎の役を理解するのに、初演は誰であったかを知ることが必要なのは、このためなのである。」ともある。これらが、「半四郎に至って、お嬢吉三の役そのものに到達した」の表す内容であると思われる。

さて、傍線部との対応関係がかなり煩雑になってきたので、ここで一度時系列を意識して状況を整理しておこう。

羽左衛門に興味をもつ
←
羽左衛門が出演している『三人吉三』のレコードを買う
←
他の役者の『三人吉三』も聞きたくなり、源之助が出演している『三人吉三』のレコードを買う

←
羽左衛門と源之助のせりふの読み方には相違点があると気づく
←

(a) 羽左衛門は立役で源之助は女形だと知る
←

(b) 半四郎は源之助より優れた女形であることを知る
←

(c) 『三人吉三』の初演は半四郎であることを知る
←

(d) 吉三は黙阿弥が半四郎のために書いた役であることを知る
←

(e) 歌舞伎の役を理解する
←

アツと思う(驚く・感動する)

さて、半四郎や『三人吉三』の初演、黙阿弥といった情報は、本文のこの部分で初めて語られるので、筆者もこの順で知識を得ていったのだと考え、先ほどのようなフローチャートを作成した。しかし、傍線部の「それを知った時に、私はアツと思った」という表現から感じられるのは、「ただちに驚いた・感動した」というような即時性である。一方、先ほどのフローチャートからは、「(a)」という知識を得て、次に、「(b)」という知識を得て、その次に「(c)」という知識を得て、その次に「…」というような比較的ゆっくりとした時間の流れが感じられる。したがって、先ほどのフローチャートはどこかが間違っていると考えられる。そこで、もう一度フローチャートを考え直

すことにする。

- ← 羽左衛門に興味をもつ
- ← 羽左衛門が出演している『三人吉三』のレコードを買う
- ← 他の役者の『三人吉三』も聞きたくなり、源之助が出演している『三人吉三』のレコードを買う
- ← 羽左衛門と源之助のせりふの読み方には相違点があると気づく
- ← (※) 半四郎は源之助より優れた女形であること、『三人吉三』の初演は半四郎であること、吉三は黙阿弥が半四郎のために書いた役であることを知る
- ← (a) 羽左衛門は立役で源之助は女形だと知る
- ← (b) 半四郎は源之助より優れた女形であることに思い至る
- ← (c) 『三人吉三』の初演は半四郎であることに思い至る
- ← (d) 吉三は黙阿弥が半四郎のために書いた役であることを思い至る
- ← (e) 歌舞伎の役を理解する

アツと思う(驚く・感動する)

このフローチャートは、傍線部の「それを知った時に、私はアツと思った」という表現から感じられる即時性を尊重しつつ、第32段落1文目の「羽左衛門から出発して源之助、半四郎に至って、お嬢吉三の役そのものに到達した。」という表現に合致するように考え直したものである。「レコードを聞いて羽左衛門と源之助のせりふの読み方には相違点があると気づき、その後、『三人吉三』にまつわる(※)の内容を知る機会があり、ある時点で、(a)の内容についても知って、そのときになって、(※)の内容をふと思い出した(b)→(d)」ということになる。

実は、(※)の内容については、どのような順番で筆者の身に起こったのが明示されていない。第28・第29段落を見ると、このあたりの前後関係はかなりあいまいに書かれていることがわかるだろう。第32段落1文目の「羽左衛門から出発して源之助、半四郎に至って、お嬢吉三の役そのものに到達した。」という表現を踏まえると、筆者は(※)で書かれている順で経験したのだと推測できる。ただし、源之助から半四郎へと移行した過程については多様な解釈が可能で、はっきりしない部分がある。「羽左衛門と源之助が演じた吉三について調べたところ初演が半四郎であることがわかり、そのときに半四郎は源之助より優れた女形であることを知り、その後、吉三は黙阿弥が半四郎のために書いた役であることを知った」というような順であったとも考えられる。どのような順序で物事が起こったのかわからずモヤモヤするかもしれないが、ここでは、「順序についてはよくわからないが、(※)というイベントがあったということとはわかっている」という理解をしておくことにする。

さて、「ここ」まで筆者の身に何が起こったのかを整理するのにかなり手間取ってしまった。「ここ」からは、設問そのものに立ち返って、「どうして筆者は『アツと思った』のか」という点について考えていこう。先ほどの考察から、「羽左衛門は立役で源之助は女形だと知り、そのときにさまざまなことを思い出し、歌舞伎の役を理解したと感じた」から「感動した・驚いた(アツと思った)」という説明ができる。ただ、これだけでは、「アツと思った」という表現から感じられる即時性を十分に説明できていないと思われる。筆者はおそらく、「羽左衛門は立役で源之助は女形である」と知って、自分ももっていたほかの知識(半四郎や『三人吉三』に関する知識)を連鎖的に思い出し、「今まさに自分は歌舞伎の役を理解したのだ」という点と点がつながったことを感じるという体験をしたのではないだろうか。体験と知識、理解が即座に結びつくという経験が、感動や驚きをもたらしたのだと考えられる。

以上を踏まえて解答を書く、「三人吉三」での羽左衛門と源之助のせりふの読み方には、硬質さを感じるかやわらかさを感じるかという相違点があることに気づき、その後、前者は立役で後者は女形だと知って、半四郎は源之助より優れた女形であったこと、『三人吉三』の初演は半四郎であったこと、吉三は黙阿弥が半四郎のためにその芸風が活きるように書いた役であったことに思い至り、体験と知識が結びついて歌舞伎の役を理解するという経験をしたから。」となる。

《解答要素》

- ① 『三人吉三』での羽左衛門と源之助のせりふの読み方には、硬質さを感じるかやわらかさを感じるかという相違点があることに気づき、
- ② その後、前者は立役で後者は女形だと知って、
- ③ 半四郎は源之助より優れた女形であったこと、『三人吉三』の初演は半

四郎であったこと、吉三は黙阿弥が半四郎のためにその芸風が活きるように書いた役であったことに思い至り、

- ④ 体験と知識が結びついて歌舞伎の役を理解するという経験をしたから。

《参照箇所》

- ① 第27段落1文目
- ② 第27段落2文目
- ③ 第28段落1～4文目、第29段落1・2文目
- ④ 第30段落1文目

問6

解答

歌舞伎を知るのに重要な働きをすることになる羽左衛門と出会い、実際にその舞台を見たことがないことに対して劣等感を抱くことになり、羽左衛門を出発点としてさまざまな想像をするという過程を経て歌舞伎の役を理解することができ、歌舞伎のことを深く知ることができたと感じ、また、劣等感からも解放されたこと。(147字)

難易度 ★★★★★

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 リード文・Ⅱ(第9～第22段落、特に第9段落、第16段落、第

22段落)・Ⅲ(第23～第33段落、特に第30段落、第32段落)

解説

傍線部は、「少なくとも私は、そこまで夢見た時に、蔵の中の羽左衛門から脱出した」という一文に含まれている。冒頭に、「少なくとも」とあるので、傍線部はこれより前の部分、具体的には、「むろん私は羽左衛門も源之助も半四郎も知らない。しかしこの決して到達することのない地点を夢見る力がなければ、歌舞伎を知ることができないのではないだろうか。」(第32

段落1・2文目)の部分を受けていることがわかる。また、ここでは冒頭に「むろん」とあるので、それより前の部分、具体的には「羽左衛門から出発して源之助、半四郎に至って、お嬢吉三の役そのものに到達した」(第31段落1文目)の部分も受けていることがわかる。さて、ここで注意しておくべきことは、筆者は羽左衛門も源之助も半四郎も「知っている」ということである。問5でみたように、筆者はこれらの歌舞伎役者についての知識をもち、知識と体験が結びついたという経験を紹介している。それでは、「私は羽左衛門も源之助も半四郎も知らない」とは、いったいどのような内容を意味しているのだろうか。「この決して到達することのない地点」という表現に注目してほしい。実は、これより前の部分で、これと同じような表現が登場している。第20段落3文目の「いくら精密に資料をかさねていったとしても、たった一度でも羽左衛門を見たという体験には到達できない」という部分である。ここでも、「到達」という言葉が使われている。したがって、「私は羽左衛門も源之助も半四郎も知らない」というのは、「筆者は羽左衛門、源之助、半四郎といった役者を実際に見たという体験をしたことはない」という意味だと考えることができる。また、「この決して到達することのない地点」というのは「歌舞伎役者を実際に見るという体験」のことを指していると考えることができる。さらに、「夢見る力」というのは、「いくら精密に資料をかさねていったとしても、たった一度でも羽左衛門を見たという体験には到達できない」(第20段落3文目)の直後にある「あゝでもない、こうもあつたらうか」と考え、想像する力」(第21段落1文目)と同内容を意味していると考えることができる。「ここまで考えると、傍線部直前の「そこまで夢見た」(第33段落1文目)というのは、第32段落2文目の「この決して到達することのない地点を夢見る力」の部分を受けていると推定することができる。ここまでを踏まえると、「この設問では、「羽左衛門、源之助、半四郎といった

役者を実際に見たという体験をしたことはなく、その体験には及ばないとわかったうえでこれらの役者についてあれこれ想像したときに、最終的に歌舞伎の役を理解することができ、蔵の中の羽左衛門から脱出した」とはどういうことを意味しているのかを答えなければならないということになる。

さて、いよいよ「蔵の中の羽左衛門から脱出した」が意味する内容について考えていく。「脱出」は、一般的に「抜け出ること」を意味する。「蔵の中」の意味については、リード文で触れられている内容(「作者が、蔵の中で歌舞伎の『勸進帳』のレコードを聞き、富樫の役を演じた十五代目市村羽左衛門の声に感動した体験を踏まえて書かれている」)、そして、第7段落1〜4文目で触れられている内容(「同級生やほんの二、三年違いの先輩はみんな羽左衛門を見ている。…しかしいくらふくらんでいったとしても、羽左衛門は私の心の蔵の中に閉じこもったままであった」)を根拠に考えていくことになる。

まずは、リード文で触れられている内容をもとに考えよう。この部分を根拠に考えると、「蔵の中の羽左衛門」は、「筆者が歌舞伎を知るのに重要な働きをすることになる羽左衛門(との出会い)」といった意味になるだろう。それでは、このような「羽左衛門」から「抜け出る」とは何を意味しているのか。本文を通して語られていたのは、いかにして筆者が歌舞伎を「知る」に至ったかという内容であった。したがって、「蔵の中の羽左衛門から脱出した」というのも、「歌舞伎を知るのに重要な働きをすることになる羽左衛門との出会いから始まる『初心者』の段階を抜け出し、(あれこれ想像するという過程を経て、)歌舞伎のことを深く知ることができた段階に入った」ことを意味すると考えることができる。

次に、第7段落1〜4文目で触れられている内容をもとに考えていく。「蔵の中の羽左衛門」は、「舞台を見ていないことに対して劣等感を抱き、実際

に見るという体験には及ばないとわかったうえであれこれ想像する対象であった羽左衛門」ということになるだろう。それでは、このような「羽左衛門」から「抜け出る」とは何を意味しているのか。一つには、「劣等感から抜け出した」という内容が表現されていると予測することができる。つまり、「蔵の中の羽左衛門から脱出した」という表現は、「実際に羽左衛門の舞台を見たことがないことに対して劣等感を抱いていたが、あれこれ想像する過程を経て、(舞台を見たことがなくても)歌舞伎を深く知ることができたと感じるに至って、そのような劣等感から解放された」ということを意味しているという解釈をすることができるといえる。一方で、「羽左衛門についてあれこれ想像する段階から抜け出し、歌舞伎のことを深く知ることができた段階に入った」ということを意味しているという解釈をすることもできる。

ここまでを踏まえて解答を書くと、「歌舞伎を知るのに重要な働きをすることになる羽左衛門と出会い、実際にその舞台を見たことがないことに対して劣等感を抱くことになるが、羽左衛門を出発点としてさまざまな想像をするという過程を経て歌舞伎の役を理解することができ、歌舞伎のことを深く知ることができたと感じ、また、劣等感からも解放されたこと。」となる。

《解答要素》

- ① 歌舞伎を知るのに重要な働きをすることになる羽左衛門と出会い、
- ② 実際にその舞台を見たことがないことに対して劣等感を抱くこととなるが、
- ③ 羽左衛門を出発点としてさまざまな想像をするという過程を経て
- ④ 歌舞伎の役を理解することができ、
- ⑤ 歌舞伎のことを深く知ることができたと感じ、
- ⑥ また、劣等感からも解放されたこと。

《参照箇所》

- ① リード文
- ② 第16段落4文目
- ③ 第22段落1文目、第32段落1文目
- ④ 第31段落1文目、第32段落1文目
- ⑤ 本文全体、特に第8段落1文目、第16段落5文目など
- ⑥ 第16段落4文目

問7

解答 ①籠(った)・籠(った) ②寄席 ③我慢 ④講師 ⑤誘拐

難易度 ★★☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

やや難しいレベルの漢字の書き取り問題だったと思われる。大学受験では、合否のボーダーライン付近で何十人もの人がひしめきあっており、本番では漢字の1点で合否が決まることもある。たかが漢字と思わずに、しっかりと漢字の知識も身につけておこう。

「講師師見てきたような嘘」については聞きなれない受験生が多いと思われるが、この言葉は、「まるで自分が見てきたかのような巧みな嘘」という意味である。今回は、「漢字の問題だが、その意味を説明するのが難しい」というケースだったが、「語句説明の問題だが、その漢字を書くのは難しい」という逆のケースも考えられる。自分で勉強するときには、「入試でどのような問題が出されたら自分が困るか」ということを念頭において、貪欲に知識を吸収するよう心掛けてほしい。

(中田敢士、森岡桃子、伊藤麻祐)

2015年度 九州大学 前期 国語

二 古文(草子)

難易度	★★★★☆
所要時間	15分
出典	『平家公達草紙』からの出題。作者未詳。成立は鎌倉時代。前書きにある通り出題本文は藤原隆房の視点を通して描かれている。作品の一部は隆房の作であるともいわれており、平家全盛時代の華やかな日々が記録されている。特に平重衡に関するエピソードが多い。出題本文も、重衡の人物像や多様な人間関係を描いた回顧録となっている。
傾向と対策	文章の読解難易度はやや低め。細部の読解で引っかかるところがあったとしても、全体の筋をつかむのに問題はないただろう。帝の退屈しのぎのため、盗人に扮した廷臣たちが女房たちを脅かしに行くという、比較的単純なストーリー。時間配分のことを考えると、古典はさっくり終わらせて現代文に時間を割きたいところだ。大筋をつかみながら、細部の読解は設問にかかわるところのみ重点的に、それ以外の箇所は時間をかけず、先に進もう。 問1は、ポイントとなりそうな単語や助動詞に注意しながら、訳抜けしているところがないよう慎重に訳す。問2はこの種の問題の対策をしていないと手強い。古文を多く読

傾向と対策	<p>んできた受験生ほどしっかり解答できたのではないかと思う。知識問題なので、わからなければとりあえず一つ答案を絞り出して、あとに回そう。問3は会話の流れを追いつつ、常識的な判断力をもとに記述。問4と問5は、本文の内容から読み取られることに、自分の想像力を加えて記述する。場面に対する自分の想像が、本文の記述の範疇を超えていなか、冷静な視点も必要である。</p>
-------	---

《この解説の使い方》

本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか(「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分)や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど(「通読」の★部分)について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使い過ぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識でつくられる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

問1 ① 人数が多くてはかえってよくないだろう。一人か二人ぐらいで行こう。

② 思わず笑い出しそうになるのを我慢して、どの女房の上着も奪って出た。

③ なぜ、昨晩に限って誰もお仕えし合わせていらっしやらなかったのでしょうか。

問2 甲 べき 乙 こそ

問3 「内のうへ」の発話。雨の降りしきる中では楽器の音色があせてしまい、情緒がないだろうと思ったから。

問4 怖い思いをした女房たちには気の毒だが、まんまとたまされおびえる女房たちの滑稽な姿を想像して面白がる心情。

問5 頭の回転が速く、いつも臨機応変にアイデアを出して場を盛り上げることができるので、帝からの信頼が厚い。度胸も行動力もあるが、悪ふざけが過ぎる軽薄さも感じられる。

本文読解

本文を読み始める前に

前書きから、本文が隆房の視点で叙述されているということを意識すると読みやすいだろう。

(注)では難解な表現の意味を説明してくれているので、あらかじめ目を通しておくべきである。

また、設問にも軽く目を通しておくとよい。問5はあらかじめ目を通しておくことで解答作成時間を短縮できる設問の典型といえるだろう。

通読

第1段落第1行～第4行「安元三年三はするに、」

◎誰が重要な登場人物かよくわからないので、とりあえず目だけ通しておこう。「内」「うへ」には「帝」の意味があるので、「内のうへ」とは帝のことを指しているとわかる。

◎「笑ひぬべからむ」の助動詞部分は、「きつとくだろう」と訳す確述用法の「ぬべし」に婉曲の「む」がついたもの。管弦の遊びをするにはあいにくの天気なので、ほかに面白いことはないかと言う帝。

第1段落第4行～第8行「左馬頭重衡も出で立つ。」

◎重衡の発言「案じ出でたるは」のニュアンスをつかむのが少し難しい。完了の助動詞「たり」があるので、すでに重衡がよい案を思いついていることを読み取る。どうやら女房たちを脅しに行こうという提案らしい。

★「中宮」とは、帝の妻のうち最高位にいる女性のこと。「女房」とは、貴人の身のまわりの世話などをする女性のこと。

◎「あやまちすな」は(注)も参照。困ったら脅して切り抜けようという、重衡の大胆さが読み取れる。

第2段落第1行～第4行「『なかなかく仰せらる。』」

◎「直衣」は貴族の平服。そのままの姿では目立って女房たちにばれてしまうので、裏返しにして変装しようとしたのだろう。盗人がきれいな青色の衣をかぶっていたら、確かに怪しまれそう。

◎「宿直」とは、宮中の警備のこと。女房たちが助けを求めても出ていか

ないよう宿直の人々にも協力を促すあたりぬかりない。

★「さし出づ」は文脈的に「出て行くな」という禁止の意味になる。「さし出づな」の「な」が抜け落ちたのだろうか。ともかく不自然な表現なので、ある程度読解できたら読み流してよいところだろう。

第2段落第4行〜第6行「やをら行く〜さまなり。」

◎「唐衣」とは、十二単の一番上に着る着物のこと。女房たちがうたた寝をしていたということをお願いしたい読み取ったら、さらっと流してよい部分。

第2段落第6行〜第8行「上に着たる〜で出ぬ。」

◎「あるかなきかのけしき」とは、意識を失いかけているような状態、茫然自失の状態。女房たちは、いきなり押し入ってきた男たちに着物を持っていかれて、気を失うほど怖い思いをした。

第3段落第1行〜第2行「さて、みなくはせ給ふ。」

◎変装を解いて「例の」Ⅱ「いつもの」姿に戻った男たちが帝に報告をする場面。帝を満足させることができたようだ。

第4段落第1行〜第4行「しばしあり〜ちにける。」

◎「しばしありて」で、場面も時間も変化していることに注意。

◎重衡や維盛が帝の中宮訪問におつきして、例の女房たちの動揺した様子を目のあたりにした。「もてなす」は「ふるまう」という意味の動詞。笑い出してしまうてはまずいので、約束でもあるかのようにふるまうて退出したのだ。

第5段落第1行〜第3行「その暁、にくき給へる。」

◎維盛は、「道で会った人たちから(着物を)取り返した」という旨の手紙を書いた。「まゐらす」は謙譲語で「差し上げる・献上する」の意味。これはもちろんつくり話。

第6段落第1行〜第2行「その程経て〜まひける。」

◎帝の暇つぶしのために実行した作戦だったが、帝がばらしたためか、提案者の重衡は女房たちから恨みを買ってしまった。

設問解説

問1

解答

《合格答案》

- ① 多くてはかえってよくないだろう。一人か二人ぐらいで。
- ② 思わず笑い出しそうになるのを我慢して、どれも取って出た。
- ③ なぜ、昨晚誰もお仕えし合わせていらっしやらなかったのでしょうか。

《満点答案》

- ① 人数が多くてはかえってよくないだろう。一人か二人ぐらいで行こう。
- ② 思わず笑い出しそうになるのを我慢して、どの女房の上着も奪って出た。
- ③ なぜ、昨晚に限って誰もお仕えし合わせていらっしやらなかったのでしょうか。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

①

まず一文目。副詞「なかなか」は「かえって」という意味をおさえておこう。形容詞「あし(悪し)」は「悪い・よくない」という意味。文末「なむ」は、強意の助動詞「ぬ」の未然形+推量の助動詞「む」のパターンなので、文全体では「多くてはかえってよくないだろう」と訳せる。

二文目は、強意の係助詞「こそ」で終わっているのので、省略を補う必要がありそう。そのまま訳すと「一人か二人ぐらいで」となるところ、文末に「行かめ」など適当な付け足しをして、「一人か二人ぐらいで行こう」と訳す。二文目で、人数が話題となっていることがわかるから、一文目の訳に「人数が」を補うとより丁寧。

②

「うち」は動詞の意味を強調したり軽くしたりする接頭語。ここではあまり気にしなくてよいだろう。「笑は~~れ~~ぬ~~べき~~」は品詞分解すると、「笑ふ」の未然形+自発の助動詞「る」の連用形+強意の助動詞「ぬ」の終止形+推量の助動詞「べし」の連体形。「念ず」は「我慢する」の意味なので、「思わず笑い出しそうになるのを我慢して」となる。

後半は、文末の「ぬ」が完了の助動詞であることに注意して、「どれも取って出た」と訳することができるが、「どれも」の内容まで指摘しておくとい。「取る」対象は女房たちの上着であるから、より意味がわかりやすくなるよう訳して、《満点答案》となる。

③

「なごや」は、「どうして」という意味の副詞「なご」に、疑問の係助詞「や」がついたもの。よって、この一文は疑問文であるということをもまず頭に入れておこう。「しも」は、強意の助動詞「し」と「も」が合わさったもの。「しも」と「しぞ」は、強意の表現としてよく登場するので覚えておこう。ここでは「昨夜」を強調して、「恐ろしい思いをした昨夜に限って……」という女房たちの気持ちが表れている。この強意のニュアンスまで訳に入れられると完璧。「さびらぶ」は「お仕えする」という意味の謙讓語。文末「ざり/ける」は打消の助動詞「ず」の連用形+過去の助動詞「けり」の連体形。これらを踏まえて訳すと、《満点答案》となる。

問2

解答

《合格答案》

「内のうへ」の発話。雨の降りしきる中では楽器の音色があせてしまうだろうと思ったから。

《満点答案》

「内のうへ」の発話。雨の降りしきる中では楽器の音色があせてしまい、情緒がないだろうと思ったから。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 主語特定+内容説明(要約型)

解説

本問の場合、発話者は、単に会話の流れからでも帝(「内のうへ」)だと判断することができるが、会話の内容を追いつらい問題であるので、敬語から発話者を判断するという方法もおこう。敬語を根拠に判断するとすれば、この段落で尊敬語のみが使われているのは帝だけなので、「このたまは

するに」から、発話者が帝だとわかる。

帝の発言のおおまかな内容は、「今は音が澄んで聞こえない」というものである。なぜこのように言ったのか。「二」の発言は、普通の「管弦の遊びをするのはいかがですか」という提案に対する返答である。帝の言う「物の音」とは「楽器の音」のことだとわかる。「ただいま」から、雨が降る夜の情景を思い浮かべると、たしかに雨の中では楽器の音は澄んで聞こえないだろうと想像がつく。帝は、雨の中では楽器の音色があせてしまい、情緒もないので、管弦の遊びは向いていないということを伝えたかったのである。以上をまとめる。

問3

解答

《合格答案》

怖い思いをした女房たちには気の毒だが、まんまとだまされた女房たちの姿を想像して面白がる心情。

《満点答案》

怖い思いをした女房たちには気の毒だが、まんまとだまされおびえる女房たちの滑稽な姿を想像して面白がる心情。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明（一般化型）

解説

重衡や隆房が女房たちを脅かすことに成功し、帝にその報告をした場面。形容動詞「不便なり」が「気の毒だ」という意味をもつことからわかるように、「不便のことかな」という発言には、帝が脅された女房たちのことを気の毒に思う気持ちが表れている。一方で「いみじく笑はせ給ふ」とあるの

は、気の毒だとは思いつつも、やはりだまされて怯える女房たちの姿が目に見え、面白くてたまらないからである。以上二つの相反する心情をもれなく答案に盛り込む。

問5

解答

《合格答案》

頭の回転が速く、いつも場を盛り上げることができるので、帝からの信頼が厚い。度胸も行動力もあるが、悪ふざけが過ぎて恨まれることもある。

《満点答案》

頭の回転が速く、いつも臨機応変にアイデアを出して場を盛り上げることができるので、帝からの信頼が厚い。度胸も行動力もあるが、悪ふざけが過ぎる軽薄さも感じられる。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明・一般化型

解説

問題文の指示を二つに分けるとすれば、①「本文中からうかがわれる」と、②「傍線部『例の重衡が』をふまえて」の二点。この二つの要求に応えつつ重衡の人物像を説明する。

指示がより具体的な②の方から考える。「例の」は「いつものように」という意味。いいアイデアが出ない中で、帝が「いつものように重衡が」と期待を見せるぐらいなので、重衡はいつもいいアイデアを提供し場を盛り上げることができる人で、帝からも信頼をおかれている、ということがわかる。残りは①のとおり、本文中から重衡の人物像が読み取れるような部分を探

し出し、重要だと思われるものを優先して、解答欄に収まる範囲でまとめるという方法をとるとよい。先に設問に目を通し、本文を読みながら、読み取れる人物像を段落ごとにメモしておくなどすると時間の節約になるだろう。

〈第一段落〉頭の回転が速く発想力に優れ、その素晴らしいアイデアでいつも帝を満足させている。問題が発生しても臨機応変に対応できる。

第一段落 頭の回転が速く発想力に優れ、その素晴らしいアイデアでいつも帝を満足させている。問題が発生しても臨機応変に対応できる。

第二段落 アイデアを自ら実行に移す度胸と行動力があるが、悪ふざけが過ぎることもある。

第三段落以降 自分が困らせた人たちを前にしても不誠実な態度をとる軽薄さが見られる。悪巧みがばれて恨みの対象になっている。

これらを解答欄に収まるようにまとめる。

本文解説

現代語訳

安元三年三月一日ころ、内裏において、三位中将基通、三位中将知盛、頭中将実宗、左馬頭重衡、権亮少将維盛、隆房などの廷臣たちが多くお仕え申し上げているときに、帝の仰ることは、「雨が降りしきって、退屈な夜の気配だなあ。目の覚めるようなことがあったらなあ」と仰るので、三位中将基通が、「管弦の遊びなどは（いかがでしょうか）」と申し上げなされると、（帝は）「それにしても、ただいまの楽器の音色など、きつと澄んでいるはずがないだろう。笑ってしまうようなことがあればよいのになあ」と仰ると、左馬頭重衡は、「さあ皆さん、事を一つ思いついたのだが」と言つと、帝は、

「いつものように重衡が、さりげなく面白いことを言い出すようだぞ」と仰つて、（重衡は）「盗人のまねをして、中宮の御殿の女房たちを脅してやりましょう」と申し上げる。（皆が）「とてもよい考えだ」と言つて、おのおの出発しようとする頃に、（帝が）「それにしても、『不審な者だ』と言つて、道で誰かに咎められるようなことがあったらどうするのか。危ないこともあるだろうよ」と仰ると、「そうはいっても、まずいことになりそうなきは、『気をつける』と申してやりましょう」と言つて出発する。

「人数が多くてはかえってよくないだろう。一人か二人ぐらいで行こう」と言つて、重衡朝臣、隆房朝臣は、それぞれ直衣を裏返して着ようとするが、隆房の直衣が柳裏であったので、「灯火の明かりでも、青く見えるのはよくない」と言つて、維盛朝臣の桜の直衣に着替えて、それぞれ直衣の袖を解いて、冠を覆うように被った。このように出発して、維盛を使者として、宿直にお仕えしている人々に、「女房たちが『早く早く』と言つても出て行くな』などと仰る。そつと行くと、西の台盤所に少し近い格子の遣戸のある間に、女房が数人寝ていた。太政大臣伊通の女御匣殿、左大将兼長女大納言殿、朝方の女右京大夫君、すゑなかの女の小少将の君などが寝ていた。それぞれ一重を重ねて、唐衣を着たまま、うたた寝している様子である。上に着ている衣を引きはがすと、途方に暮れた様子で、見なされる気持ちなどは、疑いなく、恐ろしい者たちだと思ひになったことだろう。茫然自失といった様子である。思わず笑い出しそうになるのを我慢して、どの女房の上着も奪つて出た。

さて、皆いつもの姿になって参上すると、（帝は）「うまくやったのか」と仰る。このようでしたと、先ほどのことを申し上げると、「気の毒なことだなあ」と言つて、たいそうお笑いになる。

しばらくたって、帝が、中宮の御殿へお渡りになる。お仕えしていた者は皆御供として参つた。左馬頭重衡、権亮少将維盛などは、中宮の御殿へ、出

入りを許された人であるので、「さっきの女房たちのもとへ行ったところ、『たったいまこのようなことがありました』と言って、『道理に合わないことだ』と、思っている様子が、並一通りではない」などと言い合いなさり、こらえきれず笑ってしまいそうな気持ちだったので、約束事があるような様子でふるまって立ち去った。

その日の明け方、後味が悪いと思って、維盛朝臣に手紙を書かせて「ただいま退出する途中で、このような者たちに会いましたので、取り返して差し上げよう」と言って届けてやったところ、返事に、「(私たちが)生きていて、ことを不思議なことだと思いませんか」と、大納言の君がお書きに合わせたいらっしやらなかったのでしょうか」と、そのことで重衡を女房たちがひどくお恨みになった。「恐ろしさはいままでもない。隆房に至っては、いまだに影さえ見せないのに、気を許して(寝て)いる姿を見ただろうことよ」と仰った。

その後程を経て、帝がお話しになったのであろうか、そのことで重衡を女房たちがひどくお恨みになった。「恐ろしさはいままでもない。隆房に至っては、いまだに影さえ見せないのに、気を許して(寝て)いる姿を見ただろうことよ」と仰った。

用語解説

あまた たくさん

うち ①内裏②天皇

うへ ①内裏②天皇

つれづれなり ①退屈だ②さびしい

けしき【気色】 ①様子②気配③機嫌

あそび【遊び】 詩歌管弦の催し

れいの【例の】 いつものように

おもしろし【面白し】 ①風情がある②面白い

にようぼう【女房】 宮中に仕える女性

あやし ①みすばらしい②不思議だ③身分が低い

いかに ①どのように②なぜ

なかなか かえって

あし【悪し】 ①悪い②憎い

かげ【影】 ①光②面影③人や物の影

わろし【悪し】 よくない

やをら そっと

ねんず【念ず】「他サ変」 ①我慢する②祈る

ふびんなり【不便なり】 ①不都合だ②気の毒だ

いみじ ①甚だしい②恐ろしい③素晴らしい

もてなす「他サ四」 ①扱う②ふるまう

ふみ【文】 ①漢文②文字③手紙

まかる「自ラ四」 退出する

など どうして

(松田朋佳、市川裕圭、築島愛美)

2015年度 九州大学 前期 国語

三 古文(作り物語)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	25分	紫式部『源氏物語』からの出題。平安時代中期の成立。全五十四帖からなる大部の作品であり、主人公・光源氏の一生とその一族たちの人生を描く。本文は第二十四帖「胡蝶」の巻からの抜粋である。「胡蝶」の巻名は、紫の上と秋好中宮が贈答した和歌にみられる「こてふ」の語による。作者の紫式部は平安時代の作家・歌人。一条天皇の中宮である藤原彰子に女房として仕えた。ほかの作品としては、宮中の様子を書いた『紫式部日記』がよく知られる。	本文は比較的やさしめの内容であった。難解で知られる『源氏物語』からの出題だったが、丁寧な前書きと(注)を頼りにすれば、本文に描かれた場面の前提となる情報はまず十分に手に入る。さらに、登場人物が少なく主語を追いやすかったことに加え、受験生を戸惑わせるような急な物語展開もみられない。ただし、本文で詠まれる和歌二首は少し難しかった。 設問の難易度は標準的なレベルである。解答欄の大きな記述問題三問が目立つが、そのうち問2と問6は特にクセ

傾向と対策

のない、解きやすい問題だった。同様に、問5の現代語訳、問4の文法問題も特に難しいところはない。

《この解説の使い方》

本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか(「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分)や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど(「通読」の★部分)について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使い過ぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識でつくれる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

問1 ① 嫌に思われるが

② 私のことを下にみなさってよいだろうか、いや、下にみてはいけない。

問2 かつて愛した夕顔の娘である玉鬘が、初めて会ったときの印象と異なる、いまでは母親と見間違うほどよく似ていること。

問3 「橋のかをりし袖」は思い出される昔の人物を意味し、玉鬘を昔の恋人であり彼女の母である夕顔に引き比べている。

問4 副詞／係助詞／四段動詞「忍ぶ」終止形／打消推量助動詞「まじ」已然形

問5 我が身までも命を落としてしまっではいけない

問6 義父の立場にありながら、異性としての愛情も交えて玉鬘を気に掛ける光源氏の態度を、親心にしては出過ぎたものだと言肉を込めて非難する思い。

問7 力

本文読解

本文を読み始める前に

本文を読み始める前に、前書きをもとにして登場人物の関係は整理しておく。主要な登場人物として「光源氏」と「玉鬘」がまず想定される。故人である「夕顔」が登場するとすれば、回想の形をとるだろう。わざわざ言及されている「玉鬘に求愛してくる者」たちも、何らかの出番があるかもしれない。

通読

第1行～第2行「雨のうち降くなる空を、」

◎場面の時間設定は夕方。単なる情景描写なので、わからない箇所があってもさくさく読み進める。

第2行「見出だしたくたまひて、」

◎尊敬語「たまふ」が用いられていることと、前書きの内容から、主語は光源氏または玉鬘だと思われるが、どちらであるかはこの時点では確定していない。

◎「和してまた清し」は(注)を参考にしつつ読み流す。

第2行～第3行「まづ、このくたまへり。」

◎玉鬘のことを思い出しているので、ここまでの主語は源氏。

◎例の、「忍びやかに」とあることから、①源氏は玉鬘のもとをたびたび訪れ②そのことを人に隠していることがわかる。今後の話の展開にはかわるのだろうか。

★名詞「にほひやかげさ」の意味を知らなくても、「にほふ」「にほひやかに」といった既知の古語の知識で対応する。

第4行「手習などしとをかし。」

◎「手習などして」とあり、ここまでと完全に別の動作に切り替わっているので、主語は玉鬘。

第4行～第5行「なごやかなうがたくて、」

◎(注)と前書きの内容より、「昔」＝夕顔のことが思い出されるとあるので、この「けはひ」はその娘の玉鬘の態度。

第6行～第7行「見そめたくなりけり。」

◎直前の流れから、発言者は玉鬘のもとを訪れた源氏。

◎現代語「見そめる」は「一目見て相手に好意を抱く」の意味で用いられることが多いが、ここでは「源氏が義理の娘である玉鬘を見そめる」のである

るから、「初めて見る・会う」の意味だろう。

◎「かうしもおぼえたまはず」が少し難しい。「こも思われなさらぬい」ではちょっと意味が通りそうにない。「おぼゆ」は「似る」の意味で、「こも似ていらっしやらない」だろう。

◎指示語「それ」が指すのは夕顔。源氏が、かつて愛した夕顔の面影を玉鬘に見て「あはれ」に「しみじみ」と感じ入っているのだろう。問2の解答の核はここでよさそうだ。

第7行～第9行「中将の、ささぐりて、」

◎「ものす」は文脈に応じて意味を考えるべき単語だが、ここでは「いる」で問題ない。(注)を頼りにすると、「かかる人」は(中将と異なり)親の美しさを受け継いだ人物＝玉鬘。

第10行「橋のかをくほえぬかな」

◎下の句から、ひとまず玉鬘と夕顔が似ていることをいう歌と理解する。

第11行「世とともものゝひなすを。」

◎源氏が「忘れがたき」人物はすでにこの世を去った「夕顔」だろう。

◎「世ととももの心にかけて」は見慣れない表現だが、こだわらない。源氏は夕顔のことが「忘れがた」ということだけおさえておく。

第11行～第13行「なほ、えこまへれば、」

◎二重傍線部がある。簡単な品詞分解の問題なので、「こ」で解いてしまおう。

◎「忍ぶ」には①隠す②我慢する・こらえるの二つの意味があるが、いずれの意味であれ、何かを「隠す」あるいは「我慢する」は「はずである。何

を「忍ぶ」ことができないのだろうか。

第13行～第14行「女、かやうしたまふ。」

★地の文における玉鬘の呼称が「姫君」から「女」に変わっていることを意識すると、場面の主題が恋愛に移行していることに気づきやすい。

◎「この「ものす」も「いる・ある」の意味で理解できる。

◎源氏のスキンシップを玉鬘が不快に感じている。なぜだろう。

★玉鬘の心情描写などから、源氏の態度が義理の娘に対するものから恋愛対象としての異性に対するものに変化していることに気づきたい。そうすると、源氏が「忍ぶ」ことができないのは、玉鬘に対して異性として向ける愛情のことだろうと推測が立つ。

第15行「袖の香をよくもこそすれ」

◎玉鬘から源氏への返歌。源氏の歌に対して、「私を母・夕顔になぞらえるのはやめてほしい」と応じているようだ。

第16行～第17行「むつかしとげなるに、」

◎主語は玉鬘。「むつかし」は多義語で「①不快だ②めんどうだ③気味が悪い」などの意味があるが、「こ」では源氏に突然距離を詰められた玉鬘の心情として、前二者のどちらでも読める。

◎「なつかし」は「①心ひかれる・いとおしい②懐かしい」などの意味があるが、「こ」ではそのいずれでも読める。

★玉鬘の容姿が「うつくしげなる」ことを「ま」まと述べているだけなので、読み流す。古文では服装も含めた女性の容姿を詳述することがまあるが、その具体的な内容に注目する必要はめったにない。

第17行「なかなかなくまひける。」

◎「なかなかなる」とあるのは、源氏を拒む玉鬘の姿が「かえって」源氏の目に「なつかしう」「うつくしげなる」ものとして映ったのだろう。源氏は玉鬘に異性としての魅力を感じているようだ。源氏は玉鬘に言い寄っていたのか。突然義理の父に迫られたのだ、第13行の玉鬘の態度も説明がつく。

第17行～第18行「女は、心憂くるけれど、」

◎玉鬘は源氏の求愛に一貫して拒否反応を示している。

第19行「なにか、ゝほどぞよ。」

◎「隠す」に尊敬語が用いられていないことから、主語は源氏であり、「心も源氏の心だと判断する。」

第19行～第20行「さりげなくゝしたまへ。」

◎こちらは命令形なので、主語は二人称Ⅱ玉鬘。

第20行「浅くも思ひゝむするを。」

◎謙譲語「きこえさす」を根拠に、玉鬘に対する源氏の「心ざし」「心地」であると判断。

◎「また添ふ」のは、この場面で源氏が明らかにした玉鬘に異性として抱く愛情、「浅くも思ひ聞こえさせぬ心ざし」は、もともと親の立場で抱いていた愛情のことだろう。

第20行～第21行「このおとづゝやはある。」

◎現代語訳問題。文脈から意味を考えるタイプか。

第21行～第23行「いとかう深くなりかし。」

◎「かう深き心ある人」は先ほど玉鬘に対する「世にたくひあるまじき心地」を語った源氏自身のことだろう。

◎直後に「親心」とあるので、「うしろめたく」は「気がかり・心配」の意味だろう。

◎本文読了。残り時間に気を配りつつ、取り組みやすい設問から手をつける。

設問解説

問1

解答

《合格答案》

① 嫌に思われるが

② 下にみなさつてよいだろうか、いや、下にみではいけない。

《満点答案》

① 嫌に思われるが

② 私のことを下にみなさつてよいだろうか、いや、下にみではいけない。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

①

まず、品詞分解したうえで直訳を試みる。

うたて/おぼゆれ/と

「うたて」は重要な副詞で、「嫌なことに・ひどく」と「異様に・怪しく」の二つの意味がある。品詞分解の段階ではどちらの意味で訳すべきかの判断はつかない。「おぼゆれ」は動詞「おぼゆ」の已然形。ここでは上に「うたて」とあるので、「思われる・感じられる」の意味でよい。「と」は逆接の接続助詞。よってこの段階では、『嫌なことに/異様に』思われるが」といった直訳ができる。

次に、傍線部の前後の記述を手掛かりにして「うたて」の意味を考えていく。まず傍線部の直前に目を向けると、「御手をとらへたまへれば、女かやうにもならひたまはざりつるを」とある。傍線部とあわせて読むと、源氏が玉鬘に手をつかんで言い寄ったが、玉鬘はそのような迫られ方を経験したことがないので「うたて」思われる、という流れになっている。源氏の「橋の」の和歌に対してつれない返歌をしている以上、「ならひたまはざりつる」とはいえ、玉鬘は源氏の「御手をとらへ」る行為が異性としてのアプローチであることは理解している。すると「うたて」の内容としては、「異様だ・怪しい」といふかしく気持ちよりも、義父である源氏が言い寄ってきたことに対する「嫌だ・ひどい」といった嫌悪感のほうが適切である。傍線部以前の箇所のみならず、「袖の香を」の和歌の直後「むつかしと思ひて」という記述も、「嫌だ・ひどい」の解釈を支持している。

②

まず、品詞分解したうえで直訳を試みる。

おぼし落とす/べく/やは/ある

「おぼし落とす」は四段活用動詞「思ひ落とす」の尊敬表現「おぼし落とす」の終止形。「おもひ落とす」は「下にみる・見下す」などを意味するが、

多くの受験生はこの単語を知らないと思われるので、実際の試験では前後の内容から意味を推測することになる。「べく」は助動詞「べし」の連用形だが、この時点では意味の判断はつかない。「やは」は係助詞で反語を表す。「ある」はラ変動詞「あり」が「やは」の結びとして連体形に活用したものの。しかしこの段階では、文の核となる動詞「おぼし落とす」の意味がわかっていないので直訳も難しい。

そこで次に、前後の部分から「おぼし落とす」の意味を推測することになる。傍線部直前「このおとづれきこゆる人々には、」だけを手がかりにしても「おぼし落とす」の意味を推測するのは難しいので、さらに「つ前の文」浅くも思ひきこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたくひあるまじき心地なむするを。」を見る。「思ひきこえさせぬ心ざし」と謙譲語「きこえさす」が用いられているので、「こ」で語られるのは源氏の玉鬘に対する思いである。特に難しい単語・表現もないので直訳すると、「浅くは思い申し上げない好意に、さらに加わるはずなのだから、世間に並ぶものはあるまいという気がするのだよ。」となる。つまり、源氏は玉鬘に対する自身の愛情の比喩なさを強調しているのであり、したがってここには、玉鬘に対する愛情を源氏と比較されるような人物が想定されているはずである。これを踏まえて再び傍線部を含む一文をみてみると、「このおとづれきこゆる人々」||「玉鬘に恋文を贈ってくる男たち」こそがその人物に当たるとわかる。この愛情の比較という視点を傍線部にも持ち込めば、「おぼし落とす」の意味もみえてくる。源氏は「玉鬘への」愛情を自分とほかの男たちとの間で比較したが、傍線部のほうは、尊敬語が使われていることからわかるとおり、「玉鬘からの」感情を比較しているのである。すると、「落とす」という表現が意味するのは、玉鬘の中での比較であり、源氏をほかの男たちの下におくということであろうと推測できる。

最後に、「べく」の意味を判断する。「べし」には推量・意志・可能・当然・命令・適當の六つの意味があるが、このうち二人称主語で用いられやすいのが命令と適當である。さらに、命令で訳す強い根拠①「仰せ言」など明確に命令を示す言葉がある②身分の上下がはっきりしている③相手がその言葉に従う態度を見せる、などがないので、《満点答案》では当然で訳しておく。ただし、当然で訳出する積極的な理由があるわけではないので、反語の繰り返し部分（いや、くない）を命令で訳してももちろん誤りではない。

また、反語表現は実質的に打消の意を表すので、可能の意での訳も適當である。その場合、解答は「私のことを下にみるなどできるだろうか、いや、下にみることはできない」などとなる。

問2

解答

《合格答案》

かつて愛した夕顔の娘である玉鬘が、初めて会ったときの印象と異なり、
いまでは母親と見間違うほどよく似ていること。

《満点答案》

かつて愛した夕顔の娘である玉鬘が、初めて会ったときの印象と異なり、
いまでは母親と見間違うほどよく似ていること。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

傍線部付近から光源氏が「あはれ」と感じた内容を読み取るだけの問題なので、傍線部を訳す必要はない。「あはれなり」はしみじみとした感情のことをいうので、傍線部の直前直後を確認して、源氏がしみじみとした感情を

抱くにふさわしい内容をまとめる。

まず直前の一文「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりこそあれ。」をみる。この一文は二つの内容からなることがみて取れる。前半部「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、」と後半部「あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりこそあれ」である。「見そめく思ひしを、」のほうは「初めて玉鬘に会ったときにはあまり母の夕顔に似ていると思わなかった」という内容であり、「あやしうこそあれ」のほうは「不思議と玉鬘を夕顔と見間違えることがときどきある」という内容である。後者については具体的にいつ頃のことなのか明記されていないが、前者との対比で、最近のことをいっていると考えられる。解答はこの対比を中心にまとめていく。

問3

解答

《合格答案》

「橘のかをりし袖」は昔の人物を思い出させるものを意味し、玉鬘を昔の恋人である夕顔に引き比べている。

《満点答案》

「橘のかをりし袖」は思い出される昔の人物を意味し、玉鬘を昔の恋人であり彼女の母である夕顔に引き比べている。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 和歌・内容説明（具体化）

解説

まず、(注)を参考にして「橘のかをりし袖」の意味を明らかにしたうえで

で、「よそふ」の表す内容を考えていく。

傍線部Bの「橘のかをりし袖」が、(注)の和歌「五月まつ花橘の香をか
げば昔の人物の袖の香ぞする」にある「昔の人物の袖の香」に対応している
ことは一目瞭然であるので、(注)の和歌における「昔の人物の袖の香」の
表すものを考えていく。こちらの和歌には文法・単語ともに難しいところは
ないので、直訳すると、「五月を待つ橘の花の香りをかぐと、昔親しんだ人
の袖の香りがする」となる。すると「昔の人物の袖の香」は、橘の花の香り
によって思い出されるものであり、同じ橘の香りのする袖、あるいは袖から
橘の香りが立つような、昔親しくした人のことだとわかる。

これを傍線部Bに当てはめてみると、「橘のかをりし袖」は源氏が思い出
している人物、すなわち夕顔を指していることになる。また、古語「よそふ」
は「なぞらえる・たとえる」の意味なので、傍線部全体では、「橘のかをり
し袖」＝「思い出される昔の人物」＝「夕顔」に、ある人物を「よそふ」＝
「なぞらえる」と訳せる。「こ」である人物とは、源氏が歌を詠んだ相手であ
り、その雰囲気に今は亡き夕顔の面影が見出される、玉鬘のことを指す。
以上をまとめて解答とする。

問4

解答

副詞／係助詞／四段動詞「忍ぶ」終止形／打消推量助動詞「まじ」已然形

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 文法

解説

品詞分解の際には、まず経験や慣れに従って分解したうえで、確認として、
文法を意識した検討を加えればよい。傍線部を品詞分解すると、「え／こそ／

忍ぶ／まじけれ」となる。特に難しい点はないが、悩むとすれば文末の「ま
じけれ」の扱いだろう。これも活用と接続を念頭において確認すれば、「ま
じ／けれ」のような分け方はしないはずだ。

「え」は打消の語句と結びついて不可能を表す、呼応の副詞である。「こそ」
は強意の係助詞であり、文末が已然形に変化する。「忍ぶ」は動詞の終止形
または連体形の可能性がある。「まじけれ」は係助詞「こそ」の結びとして
已然形に活用している助動詞「まじ」であり、これが終止形接続なので直前
の「忍ぶ」は終止形に決まる。活用の種類は四段活用あるいは上二段活用。
「まじ」の基本的な意味には打消推量・打消意志・打消当然・禁止・不可能
があるが、「こ」では打消推量・不可能が適当である。話し手である源氏の行
動のだから打消意志がふさわしいようにも思われるが、不可能「え」との
兼ね合いを考えると、「この二つが自然だろう。打消当然もまったくの間違い
とはいえないが、やはり不可能「え」を考慮すると自然さに欠ける。
以上の内容を、設問で示された例に倣って表記する。

問5

解答

《合格答案》

私までも亡くなったりするといけない

《満点答案》

我が身までも命を落としてしまっってはいけない

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

まず傍線部を品詞分解したうえで、直訳を試みる。

「み／さ／へ／はかなく／なり／も／こそ／すれ

「み」は漢字で書けば「実」あるいは「身」。あえて平仮名で書かれているのは、橋の「実」と人の「身」を掛けているからである。現代語訳の際、「実」「身」のどちらを中心に訳すかは追々判断する。「さ／へ」は添加の副助詞で「までも」などと訳す。「はかなく／なり」は「はかなくなる」とまとめて考えたいほうがよく、「死ぬ・亡くなる」を意味する慣用表現である。これを踏まえると、先ほどの「み」は「実」よりも「身」の字を意識したほうがよいだろう。次に考えるのが、用法に注意せよと指示されている「も／こそ」である。「も」「こそ」はそれぞれ独立で係助詞として用いられるが、複合した「もこそ」のかたちでは懸念や心配を表し、「くしたら困る・くすると大変だ」と訳す。「こそ」の影響で結びは已然形となり、傍線部末が「すれ」となっているのはそのためである。よって直訳は、「身までも命を落としたりすると困る」となる。

次に、この直訳に現代語訳として最低限補うべき内容はないかを考える。確実に補うべきは、この「身」が誰のことを指すかというもの。これを補うのはたやすく、歌の詠み手であり、故人である母・夕顔になぞらえられる玉鬘の「身」のことである。もう一点気に掛けるべきは、「み」を掛詞として訳すか否かだが、ここは「実」の意味を導く語句「橋の」が傍線部外にあることを根拠に、「身」の意味さえ訳せばよい。

問6

解答

《合格答案》

義父の立場から玉鬘のことを心配する一方で、異性として彼女に言い寄る光源氏の態度を、出過ぎた親心だと非難する思い。

《満点答案》

義父の立場にありながら、異性としての愛情も交えて玉鬘を気に掛ける光源氏の態度を、親心にしては出過ぎたものだとして皮肉を込めて非難する思い。

難易度 ★★☆☆

設問パターン 内容説明(具体化+理由補填型)

解説

まず傍線部の内容を確認する。

「さかしらなる」は「①利口ぶっている②お節介である」を意味する形容動詞「さかしらなり」の連体形。「御親心」は玉鬘に対する光源氏の義父としての親心をいう。つまり問題文にある「登場人物」とは源氏のことである。「なり」は断定の助動詞の終止形であり、「かし」は詠嘆の終助詞。「さかしらなり」は「御親心」を修飾しているので、「ここでは「お節介である」の意味だろうと見当をつけて解答を考えていく。

傍線部直前のせりふは、源氏の「思ふこと」を述べた内容である。「なにか、くうしろめたくのみこそ」とのたまふ、いとさかしらなる御親心なりかし」とある以上、傍線部の人物評が下される理由はこの発言から探るのが当然だろう。そこで、この発言内容を順番にいくつかの要素にまとめてみると、次のとおりになる。

- ①自分を拒む玉鬘の態度への非難。(本文「なにかく隠したまへ」)
- ②玉鬘に寄せる自分の愛情の深さの強調。(本文「浅くもくやはある」)
- ③玉鬘を心配する気持ちの表明。(本文「いとくのみこそ」)

まず、解答の前提としていま一度確認しておく必要があるのが、A光源氏が玉鬘の義理の父親であること、そうでありながら、B玉鬘に対して異性として言い寄っていることである。これらを踏まえて、①②③の要素をみてい

く。

①の要素については、Bに関連する内容であり、「御親心」のかかわるものではない。一方②はAとB両方にまたがる内容である。問1の解説でもふれた箇所だが、本文「浅くも思ひきこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたぐひあるまじき心地なむするを。」の一文に注目する。ここで源氏がいつているのは、要は「玉鬘に親としての愛情と異性としての愛情を抱く自分の愛情が一番深い」ということである。よってここは「御親心」にかかわるので、解答の根拠になりそうだとわかる。

要素③もはっきりと「御親心」にかかわってくる。源氏のせりふ末尾に「いかう深き心ある人は、世にありがたかるべきわざなれば、うしろめたくのみこそ」とあるが、ここでいう「いかう深き心」は②で確認した「親十異性として源氏が玉鬘に向ける愛情」のことである。

「このような深い愛情を抱く人間は『世にありがたかるべきわざなれば』世間にはめつたにいないに違いないので』、より浅い心の持ち主に玉鬘がめとられはしないかと『うしろめたくのみこそ』ひたすら気がかりである』というのが、源氏の主張である。

「こまでの確認で、③の玉鬘のことを『うしろめたく』気がかりに『思う気持ちこそが、「御親心」の内容としてふさわしいことは、説明せずともわかると思う。では、「この「御親心」に「いとさかしらなる」という修飾があるのはなぜか。また、これには作者のどのような評価が反映されているのか。これらについては、A、②および③の内容から説明できる。③で、源氏が玉鬘を心配する理由として、自分ほどの「深き心」をもつ男がそうそういないことを述べたことを確認したが、その「深き心」の内容が、A光源氏が玉鬘の義理の父親であることによる単なる「御親心」にとどまらず、異性としての愛情も内包することは、②、③でみたとおりである。つまり、「御親心」

の範囲を超えた心情から玉鬘のことを心配しているのだから、これは「御親心」としては「さかしらなる」お節介である・出過ぎている」とものと評価される。以上の内容をまとめて解答とする。

問7

解答 力

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識

解説

まず、問題文でいわれる日記とは『紫式部日記』のことを指す。『紫式部日記』の内容を思い出し、「不」登場人物を直接言い当てるのは、ほとんどの受験生にとって非現実的な方法だろう。ここでは、①作者の紫式部に関する知識②選択肢に並ぶ人物に関する知識の二つを根拠に考えていく。

作者の紫式部に関する最低限の知識として、「藤原の道長の娘であり一条天皇の中宮でもあった彰子に仕えた平安中期の文学者である」という情報は、共有されているものとする。この段階で、ア的一条天皇、オの藤原道長が除外される。

イの和泉式部については、「中宮彰子に仕えた平安中期の歌人である」という知識を前提として、『紫式部日記』にも登場するだろうと推測できる。ウの清少納言については、「一条天皇の中宮定子に仕えた平安中期の文学者である」という知識を前提として、『紫式部日記』にも登場するだろうと推測できる。

エの藤原公任については、「平安中期の歌人である」という知識以外は期待できず、これだけでは『紫式部日記』に出番がある根拠としては弱い。

カの菅原孝標については、まず『更級日記』の作者として有名な菅原孝

標女の父である」ということはわかるだろう。さらに、『更級日記』は、作者・菅原孝標女の父が任国より帰郷するところから書き始められる」という知識もあれば、宮廷生活を描写しているであろう『紫式部日記』に藤原孝標が出てくるとは考えにくい。よって、力が正解と考えることができる。

本文解説

現代語訳

雨が降りしたあとの、じつになんとなくしみじみとした夕暮れ時、御前の若楓や柏木などが、青々と茂りあっているのが、なんとなく気持ちよさそうな空を、(光源氏は)中から「覧になって、「和してまた清し」と口ずさみなさって、まず、あの姫君(玉鬘)のお姿の、つややかな美しさを自然に思い出されなさって、いつものように、人目を避けて移りなさった。

(玉鬘は)手習いなどをしてくつろいでいらっしやったが、起き上がりなさって、はにかんでおられる顔の色つやはじつに素晴らしい。もの柔らかな態度が、ふと昔の人物(夕顔)を思い出されるにつけても、(源氏は)堪えがたくて、「初めてお会い申し上げたときは、とてもこうも似ていらっしやらないと思ったが、不思議なくらい、まさしくあのお方(夕顔)かと思いつい思い違いをする折々がある。しみじみと感じ入られることであるよ。中将が、まったく亡くなった母親の美しさを受け継いでいるようにも見えないのに慣れることによって、それほどは似ないものだと思うが、このような人もいらっしやるのか」と言って涙ぐんでいらっしやる。箱の蓋にある御果物の中に、橘があるのをみてあそんで、

「橘の……(橘の香る袖に なぞらえると 異なっている姿とも思われ

ないなあ)

常々ずっと頭を離れず忘れがたいので、気がまぎれることもなくて経過した数年間のことを思うと、「こうしてお世話し申し上げるのは、夢だろうかとかかり思ってしまうが、やはり我慢できないようだ。嫌だと思いなさるな」と言って、お手をつかみなさったところ、女はこんなことは経験なさっていないので、たいそう嫌に思われるが、おっとりとした様子でいらっしやる。

袖の香を……(袖の香りをなぞらえるからといって橘の実に私の身までも死んでしまっただけはない)

面倒なことだ、煩わしいと思っただけでうつぶずしていらっしやる姿は、たいそう魅力的であり、手がふっくらと肥えていらっしやる、体つきや肌合いがきめ細やかでかわいらしいので、(源氏は)かえって悩みが募る気分がしなさって、今日は少し思うことを知らせなさる。女は情けなく、どうしようかと思われて、ついわなわなと震えている様子もはっきりしているが、(源氏は)「どうして、「う嫌だと思いなさっているのか。じつに巧みに隠して、他人に怪しまれるはずもない心構えよ。さりげなくうまいこと隠しなさい。浅くは思い申し上げない好意に、さらに(愛情が)加わるはずなのだから、世間に並ぶものはあるまいという気がするのだよ。恋文を贈ってくる者たちよりは、下にみなさってよいだろうか、いや、下にみてはいけない。まことにこころ深い心のある者は世にめったにいないはずなのだから、気がかりとばかり」と仰る。まったく差し出がましい御親心であるよ。

用語解説

例の いつもの・いつものように

忍びやかなり 人目につかない

わたる【渡る】「目三四」①移動する②ずっとする

てならない【手習】 手習い・習字

をかし 素晴らしい・趣がある

あやし ①不思議だ②身分が低い

をり 機会・折

あはれなり しみじみと思う

わざ こと・行い

にほひ 美しさ・色つや

ものす「自サ変」 ある・いる

・いろいろな動詞の代用として使われるので、訳す必要があるときには文脈に応じてふさわしい訳を考える。

年ごろ 数年間・長年

しのぶ【忍ぶ】「他バ四」「他バ上二」 我慢する・こらえる

ならふ 慣れる・学ぶ

うたて 不快に

はかなくなる 死ぬ

むつかし 不快だ・めんどうだ・気味が悪い

いみじ はなはだしい

なつかし 心ひかれる・いとしい・懐かしい

うつくしげなり かわいらしいようすだ

なかなかなり 中途半端だ・かえってしないほうがましだ

こころうし【心憂し】 つらい・情けない

けしき【気色】 顔色・態度

しるし はっきりしている

うとまし 嫌な感じだ・気味が悪い

心ざし 好意・意向

たぐひ 並ぶもの・匹敵するもの

ありがたし めったにない

うしろめたし 気掛かりだ

さかしらなり 差し出がましい

(上岡公聖、市川裕圭、築島愛美)

2015年度 九州大学 前期 国語

四 漢文(北宋の史話)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	15分	司馬光『涑水記聞』からの出題。司馬光は北宋の政治家。旧法党の中心人物とされる。歴史家としても名高く、編年体の歴史書『資治通鑑』を著した。司馬光は陝州夏県涑水郷(現在の山西省)の出身のため涑水先生ともよばれる。『涑水紀聞』は司馬光が北宋期の逸事(世間に知られていない隠れた事柄)を記録した書物。	本文は200字程度。登場人物の数が少なく、人物同士の関係性を把握するのは難しくない。しかし、細かい文意を問う問題や、なじみの薄い漢字を含む問題があり、全体的な難易度はやや高めとなっている。 特に注意すべき問題は、問1と問5である。問1では、複数の意味をもつ漢字の意味を、周りの文脈から推測する能力が問われる。この問題を解くには、周囲の文にも視野を広げ、接続詞・対比・繰り返しなどを探すことで、「称」「長」の傍線部での意味を推測する必要がある。問5は、傍線部が長いうえに送り仮名がない。一見すると難しそうな問題だが、実は文の構造が直前の文と一部共通しており、しかも内

傾向と対策

容が1文目とほぼ同じであることに気づければ、意外と簡単に解ける。漢文を読むときには、視野を広くもってヒントを探ることが大切である。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文解説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名(作品名を書き下す場合を除く)のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

問1 太尉は寇準のよいところを称賛するばかりだった。

問2 (1) 理固より当に然るべし。

(2) 太尉は長い間宰相の位にいたため政治での失敗が多く、寇準

に批判されるのは当然だから。そのうえ寇準は自分より高位の太尉にこびることなくその失敗を皇帝に伝える実直な人物であるから。

問3 太尉は自分の失敗を素直に認める謙虚さに加え、自分に批判的な人物であってもその長所を称賛する度量と公平さを備えているから。

(60字)

問4 寇準が事あるごとに私のまねをしようとするのは許してよいことだろうか、いや、許してはならないことだ。

問5 ただこたふるによろしくつとに「はやく」「こうじゆんをめし(て)しやうとなすべきをもつてするのみ

問6 a) しばしば b) ゆゑん「ゆえん」 c) おもむるに

d) にはかに「にわか」 e) ただ

本文読解

通読

王且太尉寇萊公を薦めて相と為さんとす。

◎(注) より、王且太尉は宰相。寇準も同じく政治家。

▼王且太尉(＝現職の宰相)が、(次の)宰相として寇準を推薦した。

萊公^㉑、勳太尉を上の前に短る。

◎(注) より、「上」は皇帝のこと。「数」は「しばしば」。

▼寇準はしばしば皇帝の面前で太尉を批判した。

◎太尉は宰相としてのプライドを傷つけられ、さぞ不愉快だったのではないだろうか？

而るに^㉒太尉専ら其の長を称す。

◎「而るに」は逆接。「長」は長所、「称」は称賛の意味だろう。

▼それなのに、太尉は寇準の長所を称賛してばかりいた。

◎寇準が皇帝の面前で太尉を批判していたのとは対照的に、太尉は寇準の長所を褒めてばかりいたらしい。なぜだろう？

上一日太尉に謂ひて曰く、卿は其の美を称すと雖も、彼は専ら卿の悪を談すと。

◎(注) より、「卿」は二人称。「一日」には「ある日」という意味があったな。

▼ある日、皇帝は太尉に「おまえ(＝太尉)は寇準の長所を褒めているのに、寇準はおまえの短所ばかりを言い立てる」と言った。

◎確かに二人の行動は対照的だ。

太尉曰く、^㉓理固当然。臣相の位に在ること久しければ、政事の欠失必ず多し。

◎太尉の返答。「理」は「道理」や「理屈」といった意味だろうか。「固より」は「いうまでもない」。「当然」は「当に然るべし」だから、「当然そのようであるべきだ」となりそう。つなげると、「道理はいうまでもなく、当然そのようであるべきだ」となる。不自然な訳になったけど、大意としては皇帝が言った内容を「それは当然のことだ」と言って肯定しているようだ。「臣」は太尉の自称だろう。

▼太尉が言うことには、「それは当然のことです。私は丞相の位にいる期間が長いので、政治における失敗がどうしても多くなります」

◎太尉が皇帝の言うことを肯定しつつ、自分の失敗を認めている。

準陛下に対して隠す所無く、益其の忠直なるを見る。

▼「寇準は陛下に対して（太尉の失敗を）隠すことがなく、ますます彼が忠実で実直であるのがわかります」

◎太尉が再び寇準の長所を挙げている。

此れ臣の準を重んずる所以なりと。

◎「所以」は「ゆゑん」。

▼「これ（Ⅱ前の文の内容）が、私が寇準を尊重する理由なのです」と。

③上是に由りて益太尉を賢とす。

▼皇帝は、これ（Ⅱ太尉の言葉）によって、ますます太尉を優れた人物だと思つようになつた。

初め萊公藩鎮に在るとき、曾て生日に因りて山棚を造り大いに宴し、又服用僭侈にして、人の奏する所と為る。

◎「初め」は、過去にさかのぼって別の話題を始めるときによく使われる言葉。今回もやはり過去の話題に移っている！（注）より、「藩鎮」は地方の行政組織の名称。「山棚」は山車。「服用」は身に着け用いるもの。「僭侈」は身分を超えた贅沢。

▼以前寇準が地方の行政組織にいたとき、自分の誕生日であったので山車をつくって派手に宴会を開き、しかも身に着け用いるものは身分を超えて贅沢だったため、人に奏上されることとなつた。

上怒ること甚し。

◎寇準の派手な振る舞いは、告発によって皇帝の知るところとなり、なんと皇帝を激怒させてしまった。大変だ。でも、寇準の振る舞いはそんなに悪いことだったのかな？ただ贅沢をしただけなのに。

太尉に謂ひて曰く、寇準の事毎に朕に効はんと欲するは可ならんやと。

◎よくわからないけど、皇帝は「寇準がことあるごとに自分（Ⅱ皇帝）に『効はんと欲する』のは『可』だろうか」と太尉に話しかけているらしい。どうやら皇帝は、寇準の行動が何らかの形で自分に害をあたえろと思つたらしい。

☆皇帝は寇準の「僭侈」、つまり身分を超えた贅沢に対して怒っているらしい。この時代の中国では、臣下が皇帝のように贅沢をすることは不敬とされたのかもしれない。

太尉徐対へて曰く、準誠に賢能なれども、朕を如何ともする無しと。

◎「徐」は「おもむロニ」。

▼太尉がゆっくり答えて言った、「寇準は本当に賢くて能力のある人物ですが、お調子者なのはどうしようもない（Ⅱ直らない）」と。

◎太尉によれば、寇準の欠点はお調子者であることで、今回も軽率に派手な振る舞いをしてしまったということらしい。「寇準に悪気はなかった」と弁明し、寇準をかばおうとしている。

上の意遽解けて曰く、然り。此れ止是れ驤なるのみと。遂に問はず。

◎「遽」は「にはカニ」。急遽の「遽」だから「急に」「いきなり」という意味だったはず。「止」には何通りかの読み方があるけど、文末が「

のみ」となっているから「ただ」と読むのがよさそう。皇帝はさつきま
で激怒していたのに、結局は寇準を責めなかった。「意が解ける」は「怒
りが収まる」という意味だろうか？

▼皇帝の怒りは急に収まり、「そのとおりである。これ（＝寇準）はお調子
者であるだけだ」と言った。そのまま寇準を責めることはしなかった。

太尉の疾極まるに及び、上問ふに後事を以てす。

◎「疾極まる」は「病がこれ以上ないほどに進行した」ということだろう。

▼太尉が病で死に至ろうとしているとき、皇帝は太尉に死後のことを聞いた。

⑤ 唯対以宜早召寇準為相耳。

◎細かい部分はあとで考えるところとして、「寇準を召し（て）相と為す」とい
う部分が読み取れる。そういえば1文目の内容と似ているなあ。太尉は
皇帝の問いかけに対し、1文目と同じく「寇準を宰相に推薦する」とい
うようなことを言ったようだ。

設問解説

問1

解答 太尉は寇準のよいところを称賛するばかりだった。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

傍線部①を「わかりやすく解釈」する問題。ポイントは三つ。

① 接続詞「而」

傍線部①の直前におかれた接続詞「而」の読み方は、送り仮名から「しか
ルニ」であることがわかる。「而るに」は逆接で、「それなのに」という意味。

よって傍線部①は、これまでの話の流れから見れば意外な展開になることが
予想される。ちなみに傍線部①の前の文は「寇準は何度も皇帝の前で太尉を
批判した」という内容である。

② 「専」の意味

「専せんら」は「ひたすら」という意味。

③ 「長」と「称」の意味

2行目の皇帝の発言から、「長」が「美」と同じ意味で用いられているこ
とに気づいてほしい。「長」が「長所」の意味であることがわかれば、「称
に込められた肯定的なニュアンスにも気づけるだろう。「称」には「名乗る」
や「称賛する」といった意味があるが、今回は「称賛する」が正解。

①～③から、傍線部は「太尉はひたすら『其の』長所を称賛した」と訳せ
る。傍線部直前の文と合わせると「寇準はしばしば皇帝の前で太尉の悪口を
言う。それなのに太尉はひたすら『其の』長所を称賛する」となり、指示語
「其」が指すのは寇準であることがわかる。

問2

解答 (1) 理固より当に然るべし。

(2) 太尉は長い間宰相の位にいたため政治での失敗が多く、寇準
に批判されるのは当然だから。そのうえ寇準は自分より高位
の太尉にこびることなくその失敗を皇帝に伝える実直な人
物であるから。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン (1) 書き下し (2) 理由説明

解説

(1)

傍線部②を書き下し文にする問題。やさしい問題なので確実に正解したい。ポイントは三つ。

①「理」の意味

傍線部②の「理」は名詞で、「道理」という意味。

②「固」の読み方

「固」は「もとヨリ」と読み、「はじめから」「そもそも」という意味。

③再読文字「当」

「当」は「まさしくベシ」と読み、「当然くすべきだ」という意味。

(2)

太尉が「理固当然」と言った理由をわかりやすく説明する問題。ポイントは三つ。

①書くべき内容の把握

太尉が「理固当然(道理)になんて当然のことだ」と言った理由は、傍線部のあとの文を読めばわかる。太尉は最初に寇準からの批判が「当然」である理由を述べ、次に寇準を称賛するのが「当然」である理由を説明している。よって書くべき内容は大きく二つに分けられる。

②寇準からの批判が「当然」である理由

寇準からの批判が「当然」である理由は、「臣在相位久、政事欠失必多」という部分で説明されている。現代語訳すると「わたくしは宰相の位にいる年月が長いので、政治における失敗はどうしても多くなります」となる。つまり太尉は、「自分には失政が多いだろうから、寇準に批判されるのは当然である」と述べている。

③寇準を称賛するのが「当然」である理由

寇準を称賛するのが「当然」である理由は、「準对陛下无所隠、益見其忠直」という部分で説明されている。現代語訳すると「寇準は陛下に対して隠し事がなく、いっそう彼の実直さがわかる」となる。つまり、「寇準には長所があるため、寇準を称賛するのは当然である」と述べている。

②と③の内容を合わせたものが解答となる。

問3

解答 太尉は自分の失敗を素直に認める謙虚さに加え、自分に批判的な人物

であってもその長所を称賛する度量と公平さを備えているから。

(60字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 理由説明

解説

太尉の発言を聞いた皇帝が、太尉をさらに高く評価した理由を問う問題。

問2(2)の内容を踏まえて、理由を考えてみよう。ポイントは二つ。

①自分の失政を認めた謙虚さ

問2(2)の②から、太尉は自分の業績を過大評価しない謙虚な人物であることが伺える。

②心の広さと公平な人物評価

問2(2)の③から、太尉は自分を批判してばかりいる寇準を恨むことなく、逆に長所をきちんと認めて称賛する度量の広い人物であることがわかる。字数制限が厳しいが、①と②で説明した二つの要素を必ず入れよう。

問4

解答 寇準が事あることに私のまねをしようとするのは、許してよいことだろうか、いや、許してはならないことだ。

難易度 ★★★★★

設問パターン 現代語訳

解説

傍線部を現代語訳する問題。ポイントは二つ。

①「効」の意味

送り仮名があるとはいえ、初見でこの字の意味を推測するのは難しいだろう。「文中で使われている漢字の意味がわからないときの対処法」を【参考】にまとめたので解説とあわせて参照してほしい。

「効」は「ならフ」と読む。この「ならう」にほかの漢字を当てるとすれば「模倣」の「倣(倣う)」になる。これを踏まえて「寇準毎事欲効朕」を現代語訳すると、「寇準が事あることに朕(＝皇帝の自称)のまねをしようとする」となる。寇準が自分の誕生日を派手に祝い、過度に派手な服装を身につけたことを、皇帝は「自分のまねをしている」と解釈したのである。

【余談】「効」が「倣う」という意味で用いられている言葉の一つに、「効響(ひそみなら)」「効響(ひそみなら)」という故事成語がある。「効響」の意味は、物事の良し悪しも考えずに他人のまねをすること。春秋時代の越の美女、西施には胸が痛む持病があり、痛みで眉をしかめる様子がひどく美しくかったため、それを見た醜女がこれをまねたという故事が由来。

②「可乎」の意味(反語)

「上怒甚」とあるように、皇帝は寇準の行動を「許せない」と考えていることがわかる。よって「可」はここでは「許可」の意味であり、「可乎」は、単なる疑問ではなく反語として訳そう。反語の部分を補って現代語訳すると、

「許してよいだろうか、いや許してはならない」となる。皇帝のまねをする

ことは、皇帝への敬意を欠いた罰すべき行いであると思ったのだろう。他者からの告発によって寇準の行動が皇帝に伝わったという経緯からも、寇準の行動が問題視される類のものであったことがわかる。

①と②を合わせたものが解答となる。解答欄に余裕があるため、反語の部分も省略せずに書こう。

問5

解答 ただこたふるによくつとに「はやく」こうじゆんをめし(て)し

やうとなすべきをもつてするのみ

難易度 ★★★★★

設問パターン 書き下し

解説

傍線部⑤を書き下す問題。ポイントは三つ。

①直前の文を参照して送り仮名をつける

傍線部⑤は、皇帝の質問(＝傍線部⑤直前の文)に対する太尉の返答である。これを踏まえて直前の文を見てみよう。傍線部⑤の「対以」は、直前の文の「問以(問フニクヲ以テス)」と対になっているため、「対以」は「対フルニクヲ以テス」と書き下せることがわかる。

②「為相」の意味と読み

本文の一番初めの文では「為相」を「相ト為サントス」としているため、傍線部⑤の「為相」も「相ト為ス(宰相にする)」と読むと推測できる。

③「唯」耳」と「宜」

副詞「ただ」は副助詞「のみ」と呼応する。傍線部では「唯」と「耳」が呼応しており、「唯々のみ」と書き下す。意味は「ただだけである」。

み」の直前は連体形になることに注意しよう。

再読文字「宜」は「宜よろシク」(ス)「ベシ」と書き下す。意味は「〜するの
がよい」。

①〜③を踏まえて書き下すと、「唯だ対ふるに宜しく早に(早く)寇準を
召し(て)相と為すべきを以てするのみ」となり、これをひらがなに直した
ものが解答となる。

問 6

解答 ㉑ しばしば ㉒ ゆゑん「ゆえん」 ㉓ おもむろに

㉔ にはかに「にわか」に ㉕ ただ

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 漢字の読み

解説

㉑ 「数」は「しばしば」。
同じ読みを二度繰り返す単漢字には「各」「屢」「偶(遇、会、適)」「抑」「愈(弥)」「益(滋)」「熟」「諸」「行」「略」「交(更)」などがある。入試で出題されることが多いのでぜひ覚えておこう。

㉒ 「所以」は「ゆゑん」「ゆえん」。理由や手段・方法といった意味をもつ。
今回は理由を表している。

㉓ 「徐」は「おもむろに」。物事や動作がゆっくりと起こる様子を表す。「徐

行」や「徐々に」の「徐」である。

㉔ 「遽」は「にはかニ」「にわかニ」。意味は「徐」の逆で、物事や動作が急
激に起こる様子を表す。「急遽」の「遽」である。

㉑

「止」は「ただ」。「のみ」と呼応し、限定の意を表す。「ただ」と読む漢字
には「唯」「只」「徒」「惟」「但」「特」などがある。いずれの漢字も書き下
す場合は「だ」が送り仮名になる。

本文解説

第1部 太尉が寇準を評価する理由 (〜4行目「益賢太尉」)

書き下し

王旦太尉寇萊公を薦めて相と為さんとす。萊公数太尉を上
前に短る。而るに太尉専ら其の長を称す。上一日太尉に謂ひて曰
く、卿は其の美を称すと雖も、彼は専ら卿の悪を談ずと。太尉曰く、
理固より当に然るべし。臣相の位に在ること久しければ、政事の欠失
必ず多し。準陛下に対して隠す所無く、益其の忠直なるを見る。
此れ臣の準を重んずる所以なりと。上是に由りて益太尉を賢とす。

現代語訳

王旦太尉は寇萊公を宰相の地位に推薦した。萊公はたびたび太尉を皇帝の
面前で批判した。それなのに太尉は萊公の長所を称賛するばかりであった。
皇帝はある日太尉に尋ねて言った、「おまえは萊公の美点を称賛するが、萊

公はおまえの悪いところばかりを言う」と。太尉が言うには、「寇準の主張は(い)うまでもなく道理にかなっていません。私は宰相の位に長くおりますので、政治における失敗はどうしても多くなりませぬ。寇準は陛下に対して隠し事がなく、ますます彼が忠実で正直であることがわかります。これこそ私が寇準を重んじる理由なのです」と。皇帝はこの発言によってますます太尉を優れた人物であると思った。

第2部 寇準の短所と太尉の擁護 (4行目「初萊公在藩鎮」)

書き下し

初め萊公藩鎮に在るとき、曾て生日に因りて山棚を造り大いに宴し、又服用僭侈にして、人の奏する所と為る。上怒ること甚し。太尉に謂ひて曰く、寇準の事毎に朕に効はんと欲するは可ならんやと。太尉徐ろに対へて曰く、準誠に賢能なれども、駿を如何ともする無しと。上の意遽かに解けて曰く、然り。此れ止だ是れ駿なるのみと。遂に問はず。太尉の疾極まるに及び、上問ふに後事を以てす。唯だ対ふるに宜しく早く「早く」寇準を召し(て) 相と為すべきを以てするのみ。

現代語訳

かつて萊公が藩鎮であったとき、自身の誕生日であったため山車をつくって盛大に宴会を開き、また身分不相応に豪華な服飾を身に着け、(これをよく思わなかった)人から皇帝に告発されることとなった。皇帝はひどく怒った。太尉に言ったことには、「寇準が事あるごとに(皇帝たる)私のまねをしようとするのは許してよいことだろうか、いや、許してはならないことだ」と。太尉は慎重にお答えして言った、「寇準は本当に賢明で有能ですが、お調子者であるところはどうにもできません(「変えられません」)。皇帝の怒りはすぐに収まり、「そのとおりだ。寇準はただお調子者であるにすぎ

ないのだ」と言った。そのまま(寇準を)責めることはしなかった。太尉の病が重篤になったとき、皇帝は太尉の死後のことを尋ねた。太尉は、「早く寇準を呼び寄せて宰相とするのがよいでしょう」とだけ答えた。

要旨

太尉は自身を批判する寇準を専ら称賛した。皇帝は太尉の謙虚さと公平な人物評価を知り、いっそう評価した。以前寇準が派手な振舞いをしたとき、皇帝はその分不相応な行動に激怒したが、太尉の弁護によって怒りを収めた。また太尉は、自分の死後は寇準を宰相にするよう言い残した。(131字)

【参考】本文中の語句の意味がわからないときの対処法

単語や文法をきっちり勉強していても、たまには意味がわからない語句が出てくるものである。そんなとき、解釈の誤りを最小限に抑える技を紹介したい。

①設問の選択肢に答えがないか見る

これはセンター試験で特に有効な方法で、選択肢の中に知りた部分の意味が載っていることがある。直接の意味は載っていませんが、最後の問題を見て文章の概要をつかみ、そこから漢字の意味を推測できることもある。

②その漢字を含む熟語をつくってみる

字に見覚えがある、または読み方に聞き覚えがある漢字であれば、その漢字を含む熟語をいくつか連想し、文脈に合うものを見

つけよう。

③ 対比になっていないか見る

わからない漢字を含む部分と、その前後の部分との間に対比や対句的な表現がないか確認してみよう。

④ どうしても意味がわからないとき

設問を解くのに影響がなければもう無視して先に進んでしまおう。注をつけるほど重要な漢字でもないし、きっとほかの受験生も読めないはずだ。ただ、今回の「効」のように設問部分にわからない漢字がある場合は困ってしまう。なんとか前後の文脈から意味を推測するしかない。

例えば今回の場合、「効」前後の内容を整理すると、

皇帝は寇準の派手な行動が自分に「効」しようとする行いだと思っ
て怒った。しかし太尉が寇準の行動はお調子者ゆえのことで、
けっして皇帝に「効」しようとしたわけではないと釈明し、皇帝
の怒りが収まった

となる。よって「効」は「肩を並べようとする」「まねをする」と
いった意味ではないかと推測できる。

(小林美桜、若杉柊志、上野仁士郎)